
ぽっぷこーんの雲の下で

中津川せいや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぽっぷこーんの雲の下で

【Nコード】

N1429I

【作者名】

中津川せいや

【あらすじ】

札幌のとある小学校。5年生の僕（岩崎和生）はクラス替えで瀬川香澄と一緒にになった。最初は何でもない存在だったのに、彼女と学校生活をともにしていく中で、いつの間にか気になる存在に変わっていく・・・小学生時代、初めて性に目覚めた頃の気持ちをメインに、ちよっぴり切なく、ちよっぴりHなストーリーです。

第1話「宣告の日・・・」

昭和58年 札幌でのお話し

＊

朝、目が覚める。気が重い……。今日から5年生。学年が替わることは別に何とも思わないのだが、クラス替えがある。それが苦痛で苦痛でしようがない。僕の大嫌いな武や昌明とは絶対に一緒のクラスになりたくない。

自分の部屋から出たところでいつもと全く変わらない光景・・・おかあさんは朝ご飯の支度をしているし、おとうさんは相変わらずパンツ一丁で顔を洗っている。

でも僕の中ではいろいろな思いが渦を巻いている。ひょっとしたらこの1年楽しい思いなんて全く無いかもしれない。それどころか人生が取り返しもつかないくらい劇的に変わってしまうかもしれないのだ！朝食のトーストを頬張りながら、ああ、こうやって味わって食べられるのも今日が最後かもしれないなあ・・・と思い悩んでいた。（ピンポン！）

「和生！信也くんが向かえに来たわよ！！」

「はい！」

迎えにきたのは友達の松下信也だ。1年の時からずっと同じクラス。勉強はそこそこだが、スポーツはいまいち。おまけに小学生とは思えないくらい超ドスケベ。玄関に出ると信也のスポーツ刈りの頭が見えた。

「オッス和生！学校行くぞ！俺どんなクラスになるか楽しみで楽しみで！」

「・・・ふう。そうか？俺気が重いぞ。」

「まあいいから早く行こうぜ。」

何でそんなに楽しみなんだ！？全くといっていいほど信也の気持ち
がわからん。

「行ってきます・・・」

「行ってらっしゃい！」

「和生、今日も頑張れよ！」

一体何を頑張るんやら。おとうさんは朝いつもこの一声を僕にかけ
る。意味不明だ。

＊

登校中も信也はずっと興奮していた。クラス替えだけでなく、昨日
見てたテレビの話にまで及ぶ。

「昨日のベストテンでかかったサザンの「ボディ・スペシャル？」
、あの歌サイコーだな！あんな歌放送していいのかよ！あれに比べ
たらトシちゃんや松田聖子の歌なんてクズだな。」

何がどうサイコーなのかサッパリわからん。信也はいつも一人で興
奮しながら話すので、たまについていけなくなる時がある。

「オッ！前から来るのは仲間じゃないのか！？オーイのぶあきい
！！！」

信也が興奮しながら、田中仲明に挨拶する。

「オッ、どうした仲間。朝から元気ないな？」

「おはよう。昨日夜遅くまでゲルググのプラモデル作ってて寝不足
なんだ・・・」

「暗い・・・お前相変わらず暗い奴だなあ。そんなの昼間に作ればい
いじゃん？なあ和生？」

「僕もガンダムのモビルアーマーのプラモデル何個か持ってるよ。
ビグロにビグザムにグラブロ。」

「和生は結構持ってるんだ。いいなあ。ウチはママが厳しくて全然
買えないんだ。」

仲明の家は結構厳しいみたいだった。学校帰ってからもういつも塾か

お稽古ごと。家庭教師までつけてるらしい。正直友達と遊んでる暇なんか無いだろう。面長な顔も青白く、いつも沈んだ目をしていた。「そんなことよりも早く学校行こうぜ。新しいクラスの方が先だ。」信也はガンダムの話には興味が無いらしい。自分が話題についていけなくなったら、すぐ話を変える。まあいいか。

＊

学校に着くと、校門の前に新しいクラスの名簿が貼ってあった。僕の小学校は札幌市内でも割と街中にあるが、先生の話によるとドーナツ化現象だから児童数が減ってきているらしい。そこで4年まで3クラスあったのが、5年で2クラスに減らさざるを得なくなっている。今回のクラス替えになったとのことだった。僕たち3人は偶然にもみんな5年1組だった。

「なああ和生、伸明、女の子の名前の上から8番目見てみるよ」
信也が興奮しながら言っている。上から8番目・・・高橋智枝美と書いている。

「俺達今回2組にいた高橋と同じクラスだよ！すっげえうれしいわ。俺3年の時からずっと好きだったんだよ。」
高橋智枝美・・・ちょっと甘えた感じの声で、丸顔で優しい感じの女の子。髪はちょっと長めだけどポニーテールが多いかな。背は低めでキティちゃんが好きで、他のクラスだった僕でももてるって噂を聞いたことがある。ふうん信也はああいう子が好みなんだ。

「うぎゃあ！何だこりゃ！？」
また信也が叫んでいる。

「3組の本間と瀬川も同じクラスかよ！？」
本間久美子と瀬川香澄。2人ともかなり活発な女の子で、俗にいうおてんば。スポーツも万能で、昼休みの遊びはいつもドッジボール。特に本間は男子としょっちゅう殴り合いをしている。どっちも近寄

りたくない。少なくとも僕と伸明は合わんだろう。

そうこうしてる間に僕は一人の男の名前に目がいった。・・川端昌明・・

武とは別のクラスだったが、昌明とは同じクラスになってしまった。頭はいいが、超意地悪でサイコーに性格が悪い奴。オマケに体格もいいから、全く経ち落ち出来ない。ああもうこれだけで気が重い・・。

＊

教室に入るととりあえず適当な席に座った。少なくとも4年間同じ学校に通っていたのに知らん顔の奴も結構いる。やがてチャイムが鳴って先生が入ってきた。40代半ばくらいの男の先生だ。

「はい、みなさんおはようございます。」

「おはようございます。」

「今日から私がこのクラスを担当します、滝川幸一です。じゃあ早速席を決めるので、みんな後に立っててくださいね。」

何っ！いきなり席替え！！みんな出席どころか自己紹介もしてないだろ！？何て教師なんだ！それにしても昌明とは絶対近くの席になりたくない。神様何とかしてくれ！！

「赤坂大地くん」

「はいっ！」

「君はここ。窓側の前から3番目ね。」

出席をとりながら席を決めるのか！？何とまあ横着なことをするんだ。やがて僕の番になった。

「岩崎和生くん」

「・・はい」

「君は3列目の後ろから3番目ね。」

こうして男子の席は決まった。昌明はどうやらちょっと離れた席らしい。内心ホッとした。次は女子。放心状態で全く聞いていなかった。

たのだが、やがて僕の横に一人の子が座ってきた。

「瀬川さんは4列目の後ろから3番目。岩崎くんの隣ね。」

「えっ??」

瀬川香澄だった。豪快な本間久美子の親友。いつも2セットで歩いている。こんな奴が隣の席かぁ!? 背丈は僕と同じくらいだが、体力では向こうの方が上だろう。何てこったぁ!

こうして全員の席が決まった。僕は周りを見回した。伸明は・・・本間久美子の隣だった。やってけるのか?? 信也は・・・一番後ろで隣に誰もいない寂しい席だった。

＊

初日ということもあって、席替えと教科書の配布だけで終わり。午前中で下校になった。帰りは信也、伸明と一緒に。

「何で俺だけ隣に女の子が誰もいないんだよ! あゝくそゝ!!」

信也は席順に相当納得がいかないのか、ずっと怒りっぱなしだった。「隣に誰もいない方がまだマシだよ。僕なんてあの本間だよ。おお、よろしくなんて声かけられたから、僕がうなずくと、お前返事ぐらいしろよ! 口無いかぁ!! なんて暴れだしたんだぞ。あの席ホント嫌だなぁ。」

もの静かな伸明は、本間の隣の席に相当ストレスがたまるとうだ。僕はというと、結局この日は瀬川とは一言も話さなかった。でも明日以降は伸明の二の舞いかもしれない。明日は我が身だ。そんなこんなで初日は無事終わった・・・。

第2話「初めての印象・・・」

今日から本格的に授業が始まる。

始業のチャイムが鳴り、席に座った。少し遅れて隣に瀬川香澄も座る。どんな子なのか顔をマジマジと見てしまう。顔は卵型で色白。目鼻立ちははっきりしていて、特に目が綺麗な二重で印象的。髪は真っ黒で肩にかかるかからないくらいの長さで、頭の横だけゴムの髪止めでしばっている・・・見た目結構かわいいかも？

「何？」

見られているのに思い切り気付いたのか、瀬川から、矢のような一言・・・。

「いや・・・」

言いながら、即、目をそらした。前言撤退！嫌な奴かもしれない。

＊

5年になって最初の授業は社会だった。カバンの中から教科書、ノート、地図帳を取り出そうとするが・・・無い！無い！！全部一式無い！僕は初日の授業から何をやってるんだ！？しょうがないが瀬川に見せてもらうしかない。ちよつと怖いが見せてもらうか・・・。

「あの・・・」

「何？」

「ごめん、教科書忘れたんだ。一緒に見てもいいかな？」

「いいよ。」

嫌なようでもなく割とすんなり答えが返ってきた。とりあえずホッとした。

「では皆さん、まず最初に北海道の地図を開いてください。」

滝川先生がみんなに指示した。教室中に地図をめくる音が響き渡る。僕も瀬川に見せてもらいながら一緒に見た。千歳だけピンクのマ-

カーで線が引いてある。何だろう？

「何でここだけピンクなの？」

「あっこれ？香澄の生まれたところなんだ。生まれて一年もしないで今住んでるここに引っ越したんだだけだね。」

この子自分のこと名前で言うんだ。ちよっと可愛いところあるんだなあ。

「岩崎くんは生まれたのはどこ？」

「あっ、俺？俺は室蘭。小学校1年まで住んでたよ。」

「室蘭？香澄も行ったことあるよ。親戚のおじさんが住んでてね。昔、一緒に科学館のプラネタリウムに行ったよ。」

「あっ、そうなんだ。俺もあそこ好きだったんだ。幼稚園の時、よくおかあさんと一緒に見たよ。」

瀬川つてもうちよつと気がキツイ女の子かと思ったけどちよつと意外・・・割と普通。普通どころか人なつっこい方かもしれない。

その後も授業の合間のちよこちよこ話をしたけれど、僕が今までイメージしてた姿とはちよつと違っていた。

＊

給食を食べ終わった直後だった。本間が自分の席からいきなりデカイ声で言う。

「おゝい、香澄！食後のドッジボールしようぜ！！」

「行く行くう！！」

「他にやりてえ奴いないのか？みんな外出るぞ！！」

本間のその一声でクラスの3分の2の連中はグラウンドに飛び出していった。瀬川は真っ先に吹っ飛んでいった。基本的に身体を動かすのが好きなのだろう。昔の瀬川のイメージに戻った瞬間だった。

残ったのは男子も女子も極めてインドアな人間ばかりだった。当然、僕も信也も仲間もその中に入っていた。女の子の中には高橋智枝美もいた。僕ら3人は信也の机にむらがり、○×ゲームをやりながら、

たあいも無い話をしていた。そのうち信也が、

「俺、何とかして高橋と仲良くなるきっかけが欲しいなあ。」

「あっ、そう？声かけてくれば？」

「バカかお前は！いきなり声なんかかけられるか！なあ、和生、黒板に何か可愛い絵書いて高橋の気をひいてくれよ。」

「何で俺がそんなことしなきゃいけないーんだよ！！」

「いいからいいから。お前絵うまいしさ。幸い高橋たちも前の席に群がってるわけだし。」

しょうがないので、僕は黒板の前に行った。

（さて何を書くか・・・そうだドラえもんにしよう。）

ただのドラえもんを書いても面白くないので、八頭身のリアルタイプのドラえもんを描いた。瞳は人間のように凛々しく、身体つきはプロレスラーのように逞しく・・・。

半分くらい描いたところで、信也がズカズカと黒板の前に来た。そしていきなり僕の頭を張った。痛てっ！！

「アホかお前、こんな不気味なドラえもん書いてどーする！？周りが見てて気持ち悪いだけやんけ！！」

（だったら自分で書け！！このアホッ！）

けど今のリアクションはそれなりの効果があったのか、高橋がいる女の子3・4人のグループはクスクス笑っていた。

「ごめんな、変なもん見せて。こいつアホだからさあ。もっと可愛い絵がいいよな？」

信也がえらそうに言った。すると高橋が真っ先に、

「わたしキティちゃんがいいなあ。」と言ってきた。

「キティちゃん！？こんな感じかなあ？」

信也はチョークを持ってキティちゃんの顔のドアップを書き出した。「きゅっ！可愛い！！私キティちゃん大好き！松下くんって絵うまい！」

（そんな輪郭と点の目だけの絵なんて誰でも書けるだろ。なんじゃそのリアクションは？）

信也はさらに調子に乗ってしゃべりだした。

「えっ、そうなん？俺もキティちゃん大好きなんだよ！」

「見てみて！このキティちゃんの筆入れ。可愛いでしょ！？」

「いやあ、すっげえかわいいわ！俺は男だからちよつと持てないけど。」

こうして信也と高橋の楽しいひと時が始まった。僕は単なる引き立て役だったのか……。ひとりポツンと窓からグラウンドを見る。叫び声が聞こえてくる。

「こら、お前逃げんじゃねーよ！当たれ！！」

瀬川の声だ。本間ほどではないが、感情が高ぶると乱暴な言葉になるらしい。どっちにせよ楽しそう。むなしいのは僕ひとりだ。僕の横では伸明が塾の予習をしている。こいつも楽しいんだろうか？

＊

「いやあ今日は最高の一日だったぜ！やっぱ高橋は可愛いわ。明日はどんな話をしようかなあ、グフフツ！」

放課後の帰り道、信也がにやけヅラで話してる。さらに話は続く。

「実はさあ、俺キティちゃんの絵、以前からずっと練習してたんだ。高橋がキティちゃん好きなの知ってたからさあ。いつか役にたつ時が来るとは思っていたが、まさかこんなに早く来るとはなあ！！」練習してあんなもんかい！？

「どっちにせよ次のテを考えなくてはなあ。毎日が楽しいぜ。けど前から思ってたけどお前らって好きなコいないの？」

「俺あんまり考えたことないなあ……」

「和生って相変わらずつまんねえ奴。伸明は？」

「僕は塾とかで忙しいから……」

「そんなの関係ねえだろ！？お前らそんなこと言ってる的一生結婚出来ないぞ！」

大方、小学生とは思えないセリフを信也は吐いている。そんなに女

が
い
い
の
か
？
僕
に
は
ま
だ
わ
か
ら
な
か
っ
た
。

第3話「夕陽」

新学期が始まって4日後、夜7時くらいに信也から電話がかかってきた。

「おい、和生！お前、4月26日って何の日か知ってるか？」

「・・・知らねえ。」

「バカッ！お前、俺の誕生日だろうっ！」

「あーそうなんだおめでとう。それで何かすんの？」

「実はなあ、俺んちで誕生日を開いて高橋を呼ぼうと思うんだ。」

「今まで一度も開いたこと無いじゃん！？」

「うるせえ！！俺と高橋の愛をはぐくんでいく場を作るんだよ！そこでだ、俺は明日誕生日の回覧表を作って教室に回す。どうだ、なかなかいいアイデアだろ！？」

「・・・用事はそんだけ？」

「そうだ、お前に真っ先に聞かせたかったからな！じゃあな！！」
わざわざ電話しなくてもいいのに・・・

＊

次の日の昼休み、信也は回覧表を持って、僕と伸明の前にやってきた。

「ジャーン！どうだ見てみる！！」

ノートの切れっぱしに「松下信也誕生会のお知らせ」と3分の1のスペースを使ってデカデカと書いている。残りは名前を書く欄。何故か僕と伸明の名前が既に書かれている。

「よし早速計画実行だ！楽しみだなグフフ・・・」

と、その時・・・

「えーっ、お前誕生会やるのか！俺も行ってもいいか！」

信也が振り返ると、くせっ毛のショートカットのそばかす顔のか

い女が立っていた。本間久美子だ・・・。

「あっ、ありがとう・・・」

「おっしゃー!! うまいもんいっぱい食わせろよ! おっ! お前誕生日26日か! 俺と一緒にじゃーん! 一緒に楽しい誕生会にしようぜ!」

「えっ? そっ、そうだな・・・」

と言いながら信也は呆然と突っ立っていた。顔がこわばっている。無理もない。ある意味呼んでもいないのに無理矢理押しかけられるようなものなのだから。

「なあ、香澄! お前も来るよな!？」

本間が後にいる瀬川香澄に声をかける

「えっ? 香澄も行ってもいいのかな?」

信也は答えた。

「いいよいいよ、いっぱい居た方が楽しいから・・・」

その声には既に覇気が無かった。へー、瀬川も来るんだ・・・。

「よし決まりだ! そうと決まったらグラウンドで遊ぶぞおお!!」

本間の雄叫びとともに瀬川もグラウンドに走っていった。嵐が去った・・・。

「なあ、信也。気を取り直して高橋に声かけてみれば?」

「そっ、そうだな! 行くか。」

回覧表を持って僕と信也と伸明は、高橋のいるグループのどこまで行った。

信也は覇気の無い声で、

「あのさあ、26日俺の誕生会やるんだけど、良かったら来ない?」
10秒くらいの沈黙。そして高橋が、

「ごめんね、その日おばあちゃんが来るんでママと一緒に札幌駅まで向かえに行かなきゃ行けないの。」

周りの女の子達も「智枝美が行かないんだったら私もやめとく」と次々と言い出した。

信也にはもう言葉を返す気力すら残っていなかった・・・。

＊

昼休みが終わり、瀬川が席に戻ってきた。

「ねえ、岩崎くん。」

「へっ、何？」

「松下くんってどんな感じの男の子？香澄、全然知らないんだよねえ。」

きわめて自己中で、ドスケベで、高橋大好き・・・流石に面識の無い女の子にこんなことは言えない。ちよつと良く言っておくか。

「凄く友達思いで男らしい奴かな!？」

「そうなんだ。プレゼントとかどんなのいいのかなあって思ってた。あんな奴にプレゼントなんていらん!言いかけたがやめた。信也欲しいもんなんてあるのかなあ・・・あつ、そうだ!

「あいつキティちゃん大好きなんだぜ。」

「・・・男でキティちゃん？」

「似顔絵まで練習してるくらいだからな。」

「・・・そうなんだ。ちよつと考えておくわ。」

瀬川もキティちゃん好きなのかな?それとなしに話を振ってみるか・・・。

「女の子ってみんなキティちゃん好きなのかな？」

「うーん、嫌いじゃないけど香澄はドナルドダックが一番好きかな?」

ドナルド・・・また渋いところいてくるなあ。

「今度の15日、東京ディズニーランドオープンするでしょ?俺行ってみたいなあ。」

「行きたい行きたい!!岩崎くんもディズニー好きなんだ。同じ趣味見つけちゃった!」

瀬川が笑顔で言ってきた。そんなこと言われても・・・何て答えたらいいんだ。それにしてもこのコこんなかわいい顔で笑うんだ・・・。

＊

信也の誕生日当日、学校が終わって、僕は伸明と一緒に信也の家に行った。信也は不動産屋のひとり息子でこの辺では結構でかい家に住んでいた。

（ピンポン！）

「こんにちは！」

信也が出てきた。

「・・・よお。」

「どうした？浮かない顔して。」

「どうしたもこうしたもあるか。高橋は来ないばかりか、いらんのは2人来るし、あーあー気が・・・」

（ピンポン！）

信也がしゃべっている間にチャイムが鳴った。玄関にいた僕がドアを開けると、そこには本間と瀬川が立っていた。

「ひえええ！お前の家初めて来たけど。ものすごいでかいなあ・・・。まるでお城みたいだ。お前おぼっちゃんなんじやないのかあ！！」

本間が興奮しながら言った。

「召使いとかおしゃれな猫とかいたりして・・・」

瀬川も若干引いたような感じで言った。

少なくとも2人ともこの手の家に来たのは初めてらしい。しかし・・・本間は薄汚れたジャージの上下だが、瀬川は白いブラウスの上にピンクのカーディガン。下は・・・スカートだったらよかったけど、ただのズボンか。でも結構かわいいじゃん・・・。

信也のおかあさんが玄関まで出てきた。

「あらあ、みんないらっしやい！さあさあみんなご飯の準備が出来るからあがってね。」

「おじゃまします。」「おじゃまします。」

みんな次々と家の中に上がり、信也の誕生会の料理がセッティング

されている居間にいった。男子が信也、伸明、僕と残り2人の計5人、女子が本間と瀬川の計2人。人数的には多くもなく少なくもなくという感じだった。

＊

信也の家の料理は凄かった！から揚げが大皿に山盛り。握り寿司も大皿一面にぎっしり。その他にもハンバーグやコロツケ、エビフライなどが、大皿にところ狭しと並べられた。

「うめえ！これ超うめえ！！今までこんなうまいから揚げ食ったことねえ！」

本間が目の色を変えながら目の前のから揚げにむさぼりつく。それにしても今までこんなすごい食い方をする人間を男にせよ女にせよ見たことが無い。本間の噛んでいるから揚げにはヨダレがしたり、辺りにはコロモが飛び散っていた・・・。

「久美ちゃん、もっと落ち着いて食べれば？別に無くなるわけでもあるまいし・・・」

瀬川が冷や汗をかきながら本間に言った。瀬川は本間と違って多少女っぽい部分あるなあ・・・しかし、2、3分後、そう思った自分に後悔した・・・。食べ方は確かに本間のように汚くはない。しかしものすごい大食いだっただ。小皿の上のから揚げ、一瞬のうちに消えた・・・。寿司を取った。これも一瞬・・・。みるみるうちに大皿の料理が消えていく。本間がむさぼりつく理由もわかってきた。瀬川の食うペースが速いのだ。料理の3分の2は明らかに本間と瀬川で食っていた。残りの3分の1をうちら男子で食べる感じ。伸明なんてほとんど食べてないのでは？信也はつまらなそうな顔で目の前の料理を何も言わず黙々と食べていた。

「あつ、そうそう、松下くんにプレゼント渡すの忘れてた。はい、これ！」

瀬川がカバンの中から袋を取り出した。ピンクのリボンがついてい

て花柄の包装紙で包まれている。

「松下くんの大好きな、キティちゃんのレターセット!」

「へっ、キティちゃん? 何で俺が??」

「あれ? 松下くん、キティちゃん好きじゃなかったっけ? 岩崎くんから聞いたよ?」

せっ、瀬川! 何てこと言うんだ!

「あっ、ありがとう・・・」

気の抜けた声で瀬川に礼を言うと、信也は僕の方に冷たい眼差しを向けてきた。もう知らん顔してメシ食うしかなかった。それと同時に信也が以前高橋に言っていたキティちゃんが好きということも大嘘だということがわかった。調子のいい奴め・・・。

「どう、料理の方は? みんな美味しかった?」

信也のおかあさんが居間に入ってみんなの様子を見に来了。

「おばさん、すっげえ料理上手いな! 今度俺にも教えてくれよ!!」
「やっぱこんな貴族のような家に住んでると作るもんも違うな!」

本間が信也のおかあさんに興奮しながら言った。

「そっ、そうね今度教えちゃおうかしら?」

信也のおかあさんは一応言葉を返すが、本間の態度に明らかに引いている感じだった。

「あっそうそう、おばさん俺も今日誕生日なんだぜ! 早速ケーキ出してくれよ!!」

「あっ、そうね。もう出して来ようかしら・・・信也ちょっと・・・」

信也がキッチンまで呼び出された。

「何ママ?」

「あんな子もう連れてくるんじゃないありません!!」

＊

「ふう、食った食った・・・。」

本間が腹をなでながら言う。あれだけの料理とケーキを食ったらそりゃ腹もきつくなる。

「みんな、外で何かして遊ぼうぜ！あれっ？お前の家の横ってあんな広い駐車場あるの？」

本間がおもむろに窓を見ながら言った。車が対で10台くらいとめれる駐車場がある。

「あれはウチの駐車場じゃないよ。隣のアパートの駐車場。」

駐車場の横には確かに3階立てのアパートが2棟並んで立っていた。

「おーし、駐車場でボール遊びしようぜ。こんなこともあるうかと俺ボール持ってきてるんだ！」

みんなで外に出てとりあえず駐車場に行った。あまり気乗りはしなかったが、とりあえず何もしないよりマシだ。

「うーん、思ったより狭いな・・・おっ、あのアパート横にハシゴがついてて屋上まで上がれるぞ！みんなで登ろうぜ！！」

えっ？その言葉を聞いた瞬間、思わず言葉を失った。確かにアパートの横にはハシゴがついている。どうみてもゆうに10メートル以上はある・・・あんなのに登って足でも滑らせたら頭から真っ逆さまだ。まさかみんな登んねえよな・・・。

「どうした松下？おまえ怖いのか？」

「怖くなんかねえよ！こんなの余裕さ！」

「ようし！じゃあ登ろうぜ！」

真っ先に本間が登って行った。続いて信也、そしてその後に瀬川、その後が続いて男達が次々と登っていく。結局下に残ったのは僕と伸明だけだった。

「俺、悪いけど塾があるので帰るね・・・」

伸明はそう言うと、僕を一人残してそそくさと帰って行った。おいそりゃねえだろ？ホントに塾なのか？居場所悪くなっただけじゃないのか？

やがて上に登った奴らの喚声が聞こえた。

「結構広いなあ。それにいい景色だぜ！」

「やあい、岩崎！お前だけ登れないでやんの！！」

本間が屋上から僕を見下ろして言う。さらにたたみかけて来る。

「お前怖いんだろ！？情けねえなハハハッ！！」

どんなに何言われようとかまわない。怖いもんは怖いんだ。もし落ちて死んだらどうするんだ・・・。

そのうちみんな次々と降りて来た。飽きたのか！？

「あー面白かったな！さあて、もう一回登ろうか！？」

もう一回登るのか！？こいつら何考えてるんだ？

「あっそうだ一人だけ登れない奴いたな！うわーっ男のくせに恥ずかしい！」

からかうのを楽しむかのように本間が言った。

「和生も登ってみろよ！結構楽しかったぞ！」

メシ食ってる時あれだけ沈んだ顔してた信也が、達成感に満ちた顔で僕に言ってきた。お前さっきの顔は何じゃい！？屋上登っただけで幸せになるのか？僕は絶対に登らん！！

「松下やめとけよ。こいつ怖いんだってよ。情けない奴。よし、またみんなで登ろうぜ！」

本間の後に次いでまた次々とみんな登りはじめた。

「ねえ岩崎くん、登ってみようよ。」

瀬川だった。何でそんなこと僕に・・・。

「嫌だよっ！」

「大丈夫！怖かったら香澄が後からついてあげるから。」

正直登るのは怖い。でも僕のためにここまで言ってくれるのなら・・・

・登ってみようかな、瀬川がついてくれるのなら・・・。

「一回だけだぞ。」

「うん、わかった。」

＊

ハシゴに手をかけた。正直この時点で手が震える。右足をかけた。もう戻れない。自然と手に握る力がかかる。左手を渾身の力で握って右手を次のバーへ。そこまでいったら両手を渾身の力で握って右足を次のバーへ。身体の震えが止まらない。目線は上だけ。前列最後の信也のケツが目線から消えた。屋上まで登り切ったらしい。

「岩崎くん、絶対下見ちゃ駄目！真っ直ぐ上だけ見てて！」

真下にいる瀬川の声。正直返答なんてする余裕は無かった。弱いながらも横風が吹いてくる。これで体勢を崩したらどうしよう。それよりもハシゴが腐っているかもしれない。さっきから何人も登っている。折れるかもしれない。こんなところで死にたくない！

左手をバーに・・・右手はしっかり握って。次は左足だ。もう自分でもわからない。必死にしがみつくだけだ。

「岩崎くん、あとちよつとだよ！がんばって！！」

ようやくゴールが見えてきた・・・。あとちよつとだ。でも絶対力を抜くな！死ぬぞ！！右手を次のバーに、左手をしっかりと握って・・・。

ようやく屋上にたどりついた・・・まだ震えが止まらない。少し遅れて瀬川もたどりついた。

「岩崎くん、やれば出来るじゃん！やったね！！」

すごく嬉しそうな顔。まるで自分のことのように喜んでいる。そんなに僕が登ったのが嬉しいのか？先に登った本間や信也達は屋上を走り回っている。おにごっこでもしているようだ。

「岩崎くん、見てみて！すっごいきれいだよ！！」

瀬川の指差す方を見た。僕たちの住んでる街・・・まるでブロックのようにいろんな建物が並んでいる。しかも夕陽に照らされ辺り一面オレンジ色に染まりながら。瀬川はこの景色を僕に見せたかったのか・・・。

「あそこが香澄の家だよ。あのビルの下のアパート。」

瀬川が一生懸命説明している。しかし逆光になっているのか真っ暗でわからない。

「ごめん、暗くてわからない・・・」

「駄目だな目悪いな！ねえ、岩崎くんの家は？」

「俺んち？ああ、そのスーパーの横のマンションの5階。」

「香澄の家からはちよつと離れてるな。」

ちらっと瀬川の方を見た。横顔が夕陽に照らされている。前髪が顔に軽くかかっている部分が、瀬川の顔に細い影をいくつか落としている。夕陽のオレンジに染まった顔・・・ずっと見ていたいな。

「瀬川。」

「んっ？」

「瀬川って誕生日いつ？」

僕何聞いてるんだろう？でも瀬川のこともっと知りたい・・・。

「7月17日だよ。」

夏生まれなんだ。何か明るくて活発なところがそんな気がする・・・。

「岩崎くんは？」

「俺、12月10日。」

「そうなんだ。クリスマスも近いしひと月でプレゼント2度ももらえてラッキーだね！」

「どっちかひとつだよ。さすがに気がひけるし・・・ねえ、瀬川って好きな食べ物何っ？」

「えっ？何で？」

「何でって？」

「いや何か質問が多いからさあ・・・」

「ごめん、つい何か・・・」

「寒くなってきたしもうそろそろ降りようか！おい、久美ちゃん、もうそろそろ降りよう！！」

「そうだな、そろそろ降りるか！よっしゃ！！」

本間を最初にみんな続々と降り出した。僕は瀬川の次。一度登って多少なりとも度胸が付いたせいかな、降りるのは割とすんなり行けた。

＊

「そろそろ帰ろうか！じゃ、また明日。」

「バイバイッ！」

今日の信也の誕生会に満足したのか、みんなそれぞれの家に帰って行った。

一人の帰り道、今日のいろんな出来事が頭の中をよぎった。僕がアパートの屋上に登れた時の瀬川の嬉しそうな笑顔。瀬川の夕陽に照らされた横顔・・・僕は何を考えているんだ？瀬川以外にもかわいい子なんていっぱいいるじゃないか？何で気になる・・・。

第4話「運動会」

北海道の小学校の運動会は大体5月末から6月の初めにかけて行われる。僕の小学校も例外ではなく、今年は、5月29日の日曜日が運動会だった。

・・・運動会には嫌な思い出がある。僕は小学2年までずっと徒競争がビリだった。2年の時の運動会が終わった夜、僕は両親にこっぴどく叱られた。お前は真剣に走ってない、運動会で今度ビリなんて取ったら家から追い出すと・・・。スポーツ万能でいつもリレーの選手に選ばれていた両親からしてみたら、僕の走りがたいそう気に入らなかったらしい。もの凄くショックだった。僕だって一生懸命走ってるのに何で認めてくれないんだ？あの時は悲しくて涙が止まらなかった。それ以降、運動会の徒競走は命がけだった。絶対ビリにはなれない。ビリだったら家から追い出されると・・・。体育の授業。今日は教室で運動会の説明およびリレーの選手を決める話だった。

「今年から、各学年2クラスになったのでリレーは4・5・6年生のそれぞれのクラスから選手を出して、計6チームで争います。」
滝川先生がみんなに説明をしている。僕は足が遅いのでリレーなんて関係ない。選手に選ばれることもない。どうでもいい話だった。男子のリレー選手が滝川先生より指名される。計5名。眼中になし。俺の嫌いな昌明が第3走者らしい。興味も無い。つまらない授業だ。
「次、女子のリレー選手をいいます。第1走者 加藤明子。第2走者 大町恵・・・。」

これも興味無し。どうせ本間と瀬川はどっかに入っているだろう。

「第4走者 瀬川香澄」

「・・・はい。」

いたって普通の返事。別に対して嬉しくもなさそう。

「アンカー 本間久美子」

「おっしゃ!!」

遠くの席ではガッツポーズを取りながら久美子が喜んでいる。おめでたい奴。

「でも瀬川すごいじゃん!? 今回もリレーの選手なんて。」

瀬川に声をかけてみた。

「まあね、毎年選ばれてるわけだし。」

頬杖つきながらそっけない返事。いかにも自分が選ばれて当たり前かのごとく。しかも目が怖ろしく醒めている。何でえ、せっかく良かったねって言おうと思ったのに。

＊

5月になって運動会の練習が始まった。練習といっても、6年生の組体操、4年生のマスゲームに比べ、5年生は障害物競走だったのだ、これといって練習らしきものも無かった。トンネルをくぐって、風船ふくらませてイスに座って割って、平均台の上を渡って終わり。風船なんて練習の度に割るもんでもないので、実質走って平均台を渡るだけの練習だった。ひとりづつ走るわけだが、その間待っている人は座ったまんま。言うまでもなく雑談の場になった。

「みろよ和生、高橋のあの走り方。やっぱりかわいいなあ。」

信也がニタニタ笑いながら言った。見ると高橋は左右に手を開くようなおかしな走り方をしている。信也はあんな走り方を見て胸がときめくのだろうか？

「あの平均台の前で一度立ち止まってとまどうところがまたかわいいいんだよなあ。」

信也はすっかり高橋に酔いしれているみたいだ。

瀬川が走っている。軽く流しながら感じて。そのまま平均台にピヨン! 無難にゴールした。何だか障害物競走にはさほど興味はないようだ・・・。

「瀬川はあいつリレーにしか興味無いみたいだな。今回も本間にア

ンカー取られて気に入らないみたいだぜ。あいつ自分が一番速いと思ってるみたいだからな。」

信也がどっから仕入れた情報かわからないがそんなこと言い出した。

「実際はどっちが速いんだ？」

「どっちもどっちだな。この前の50メートル走では本間が0.1秒だけ速かったけどな。」

普段は友達同士の2人だが、お互いライバル意識があるらしい。

でもそんなのどうでもいい。僕は徒競走でビリにならないよう死にもの狂いで走るだけだ。

＊

運動会当日の日が来た。グランドの真ん中に1周100メートルくらしいの白線で引いたトラックがあって、そこでいろんな競技をする。グランドの校舎側は生徒の席、教室からイスを持ってきて学年、クラスごとに座る。道路側は保護者の席、みんなレジャーシートを敷いて、子供達を応援している。

校長先生の話が終わって、最初は徒競走だった。1年生、2年生、3年生、4年生と続き、うちら5年生の番になった。

何組か走っていいよ僕の番。走者は4人……。何とか行けるか？

(よいい・・・パンツ!!)

ピストルの音とともに一気にダッシュ。渾身の力で走る、前の奴だけ異様に速い！でもこいつを追い越す気で走れば何とか2着にはなれる。よおおおおおし・・・。

結果は2着。今までの運動会の中では一番よかった。今年も何とか首がつながった。

肩の荷が降りた。これで僕の心の中での運動会はおしまい。障害物はお遊び。あとはおかあさんの作った弁当を昼休みに家族で食って帰るだけだ。

＊

障害物競走も終わり（これも僕は2着だった）、次は4・5・6年合同の女子リレーだった。本間や瀬川達が席を立ててグラウンドに行く。

「みんなあ！がんばってくるぞっ！！応援してくれよっ！！」

本間が一人で興奮している。何そんなに興奮してるんだコイツ？

第一走者がトラックに並んだ。ウチの第一走者は加藤明子。多分、足は本間、瀬川の次に速い。そこそこいけるんじゃないだろうか？（位置について。よいい・・・パンツ！）

スタートダッシュ・・・ワントempo遅れた。失敗だ。まあでも加藤の足なら普通に走っていれば何人が抜くことは・・・何っ！みんな無茶苦茶速い！特にあの4年1組の奴は何だ？

3コーナーを回ったところで4人の走者がダンゴ状態。そこから4・5メートル遅れて後続2人。加藤は・・・現時点で5位だ。

「ああ、こりやまずいわ！」

「おおまちい！気合い入れてどんどん抜けっ！！」

クラスの連中が声援を送る。みんなやけに気が高ぶってる。僕だけが冷静な顔で見ている。

第二走者の大町恵にバトンが渡る・・・駄目だ、遅い！差はますます広がる。ダンゴ状態だった上位4人の間隔が広がる。それぞれ1メートルくらいは開いているようだ。4コーナーを回る。4人目から3メートルくらい開いて大町。5位のままだった。

「もう駄目だあ・・・」

「きくちい、1人でもいいから抜いてくれ！！」

「それにしても4年にも負けるなんて・・・」

あきらめて落ち込んでる奴、望みを捨てないで応援してる奴、みんなそれぞれの思いを胸に応援しているらしい・・・。

第三走者菊池敬子にバトンが渡った時点で、1位6年1組、2位6年2組、3位5年2組、4位4年1組、そして5位5年1組だった。

まあ僕はこんな興味が無いからどうでもいいんだけどね。それにしても周りの奴らのテンションの高さは何だ？別にお前らが走っているわけじゃないだろ？そんなにクラスが勝つのが嬉しいか？そんなにクラスが負けるのが悲しいか？僕は自分のことだけで手一杯だ。今までも。

菊池はそこそこ頑張ってるみたいだったが・・・やっぱ前との差は縮まらない。4コーナーを回っても間隔はそのままだった。

「せがわーっ！がんばれー！」

「せがわーっ！根性見せてやれーっ！！」

周りの応援も熱が入る。瀬川にしてもいい迷惑だろ。

瀬川にバトンが渡った・・・いきなり猛ダッシュ！

前の走者がバトンを渡すのに失敗して足がもつれた。最初の1コーナーで一気に抜いた。

「うおおおおおっ！！」

「せがわいいぞお！！」

周りから大歓声があがった。

ちらっと瀬川の顔を見た。目と眉がものすごいつりあがっている・・・今までこんな真剣な顔の瀬川見たことがない。しかも・・・すっげえ速い！

2コーナーを回ったところで3位の選手との差は1メートル。少しづつだが差が小さくなっていく。3位の選手が後をチラチラ見る。

瀬川が怖ろしい勢いで猛ダッシュをかけている。

「せがわーっ！がんばれー！」

「せがわーっ！もうちょっとだぁ！！」

クラスの連中の声援がどんどんでかくなる。駄目だ、僕も目が離せない。

・・・今回のクラス替えて僕の隣の席になった女の子。何気なく話すところから始まって、いつの間にか僕の中で意識しちゃう存在になって。今はクラスの声援を一身に浴びて必死でそれに応えようとしている。なぜか心臓の鼓動が速くなっている。香澄・・・すっげえ

かっこいいよ・・・。

3コーナー、とうとう並んだ。香澄と3位にいた選手がお互い歯を食いしばりながら必死の形相で争っている。相手のアゴが上がった。香澄がリードした!!それでも香澄は歯を食いしばったままラストスパートの手を弛めない。

香澄、香澄・・・僕は心の中で香澄の名前を必死で呼んでいた。

4コーナー回って、2位との選手の差が50cm・・・アンカーの本間まであと20メートル、10メートル、とうとう並んだ!必死の形相で相手に食らいつく香澄。もうちょっと、もうちょっと!香澄、香澄・・・。

「かすみっ!まけるなっ!あとちょっとだ!!」

気が付いたら思わず席を立てて叫んでいた・・・。信也が丸い目をして僕の方を見てる。

「久美ちゃん!」

「香澄、よくやった!あとはまかせろっ!!」

アンカーの本間にバトンが渡る。僅差でこっちの方が早い!2位浮上だ!!

「うおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
叫びながら本間が猛ダッシュ!

本間がバトンを受け取った時点で1位との差は4、5メートル・・・。

本間、お願いだ。あと一人絶対抜いてくれ・・・。香澄の、香澄があれだけ頑張ったのを無駄にしないでくれ・・・。頼む!

2コーナー。本間は相手の背後にピッタリとついた。でも抜けない・・・。そのままの状態で3コーナーに突入。

「くそっ!!こんなところでまけてたまるかあっ!!」

本間がでかい声で叫ぶ。アホッ!こんなところで叫ぶな!呼吸が乱れてしんどくなるだろ!!

最終コーナーに入った時だった・・・。

「でりゃあああああああああっ!!」

本間がこの世のものとは思えないくらいの声で叫んだ。その瞬間一気に1位の選手を抜いた！しかも抜いた後もどんどん差をつける。

(ゴール!!)

「やったあああああああああああああつ!!」

本間がゴールした瞬間、クラス全員が総立ちになった。結果として2位を2メートルくらい引き離しての1位。何だろう、目の前がかすんで見えない。何故か涙があふれてくる。そんな僕を尻目にみんな本間のところになだれこむ。

「おっしゃ!!」パチンッ!!

「よくやったぞ本間!!」パチンッ!!

「ありがとう久美ちゃん!!」パチンッ!!

クラスのメンバーが各々言いたいこと言いながら本間と手を合わす。次から次へと本間に手が飛んでくる。気付けは本間はクラスのメンバーに四方からバチバチ叩かれ揉みくちにされていた。

「いててててててっ!やめろっやめろよ!!」

そう言いながらも顔は笑っていた。そしてみんなが叩き終わると、

「よっしゃー!ー!ー!っ!やったぞっ!!」

と雄叫びをあげた。その後クラス全員の大歓声があがった・・・。

気が付くと僕だけ一人イスから立った状態のままだった。目の前には本間をかこんでまだみんな喜びをわかちあっている。僕だってこんなに嬉しいのに、こんなに良かったなと思うのに、何故かこの輪の中に入っていない・・・。そうだ俺泣いてたんだっけ。誰も気付かないうちに顔洗ってこよう・・・。

みんなに気付かれないようにグラウンド横にある水飲み場まで行った。

一人、飲み台に両手をもたれて前かがみでうつむいてる子がいた・・・
・香澄だった。目と目があった。僕は一言・・・。

「ありがとう。すっげえよかったよ。」

香澄は何も言わず微笑み返してくれた。最高の笑顔だった。

*

夕食はすき焼きだった。おとうさん、おかあさんが今日の運動会をネタにいろいろ話した。

「和生も2着か！やれば出来るじゃないか！！」

「ウチの子なんだもん、真剣に走れば遅いわけないんだから・・・」全然嬉しくなかった。それどころか逆に悲しかった。今までだって決して真剣じゃなかったわけじゃない。僕はいたい・・・。

「そういえば、リレーで3人一気に抜いた女の子、かわいい子だったね。」

おかあさんが唐突に言った。ギクツとした。

「そうかぁ？」

わざと興味ないかのように言い返した。しかし、今日おかあさんから聞いた言葉で一番嬉しい言葉だった・・・。

第5話「スーパーマーケットでのひととき」

6月になって、性教育の授業があった。男女別々で、男子は視聴覚室に移動、女子は教室に残って授業を受けた。ビデオを使つての授業、正直目が釘付けだった。心臓の鼓動が高鳴り、気が付けばおちんちんがもの凄く硬くなっていた・・・これ、人間のすることなんだろうか・・・？

＊

「すっ、凄かったなあ！まあ俺はあんなの昔から知ってたけどな！」
教室に戻る時、廊下で信也が言う。

申明は何の言葉も発しない。よっぽど衝撃が強かったのか。
教室に戻った。香澄が座ってる。直視出来ない・・・。女子は女子でどんな内容だったのだろう。香澄も僕と視線を合わそうとせず、ただ無言だった。

「さあ、みんな席に着きましたか？それではこの席で2ヶ月近く経ちましたので、今から席替えをします！」

滝川先生がいきなり言い出した。教室中どよめきが起こった。

「えっ？席替え？」

啞然とした。一瞬、香澄の方を見ようとした。けど今は見れない・・・
・多分見た瞬間顔が赤くなっちゃう。香澄も僕の方を向こうとしない・・・
・結局、無言のまま別々の席になってしまった。

＊

帰りは信也、申明と一緒に帰った。

「おい、二人とも久々に俺んちに遊びに来ないか？」
信也が言いだした。特に用事もなかったので、学校帰りにそのまま

ビデオテープを入れて再生した。金髪の男と女がベッドの上で向かい合っている。

「ここは面白くないんだ、早送りするぞ」

信也が早送りボタンを押した。男と女がものすごい勢いで服を脱いでいる。

「ここからがすげえんだよ！見てみるよ！！」

男が女の股間をなめている・・・そこから腹、胸とどんどん上をなめる。やがて男の顔が女の顔の前まで来て、ふたりは熱いキス・・・お互い舌まで入れ合っている。おちんちんがぼやけている。男は自分の手で支えながら、女のところに入れる。その瞬間女が絶叫している。ものすごい勢いで腰を振る男・・・僕も大人になったらこんなことするんだろうか？

そんな時の相手は・・・。

「どうした和生、真っ赤になっちゃって。瀬川のこと想像してただろ！？」

「・・・・・・・・・・ばっかっ。」

「俺なんて高橋とやってるとこ想像しながらいつも一人でやってるぜ！」

思わず信也と高橋が裸になって入れてるところを想像してしまった。それにしても一人でやってるって・・・。

（ガタッ！）

伸明が急に立ち上がり、信也の家を飛び出して行った。あいさつも何も無い・・・。

「何でえあいつ、いつも変な奴だな。あいつ好きな女とかいるのか？それ以前にあいつが女の子と話してるの見たこと無いぞ。」
信也が不機嫌そうに言った。

「何だかしらけちゃったな。今日はこの辺にするか・・・。」

僕は胸の鼓動が鳴り止まない中、信也の家を後にした。

＊

夜、なかなか眠れない……。昼間の授業と信也の家であんなビデオ見せられたからには。相手の女が全部香澄と重なる……。香澄い、香澄も大きくなったらあんなことやらの？

ふと時計を見てみる……。0時27分。家族はみんな寝静まっている。部屋の電気をつけた。

ベットの上でパンツをゆっくり降ろしてみた。おちんちんが硬くなっている……。うっ。

香澄のあそこの中にこれが……。入るのかなあ……。信也一人でやってるって言ってたっけ？ ころなのかなあ……。くすぐりたい……。香澄い、香澄い……。

＊

性教育の授業があった日以降、僕は毎夜家族が寝静まってから、香澄に入れてるところを想像しておちんちんをさわるのが癖になってしまった……。今日で止めよう、今夜限りにしよう……。毎晩そう思っているのに止められない。

授業中は香澄の方ばかり見ていた。席が離れて尚且つ遊ぶグループも違うので普段は話をすることも無い。そんな状況の中、香澄に対する思いは、僕の頭の中で日を増すごとにどんどん膨らんでいった。

＊

6月も終わりに近づいてきたある日、晩ごはんを食べ終わった後、おかあさんが、牛乳と卵を買いに近くのスーパーに行ってくれと僕に頼んだ。

スーパーは僕の家から歩いて3・4分のところにあった。10年くらい前はボーリング場だったらしく、レーンのあったところは食料品売り場。そこから階段を何段か上がって受付等があったところは、

本屋や雑貨屋、おもちゃ屋等があった。

スーパーの中に入り、食料品売り場に行く前に店内の雑貨屋に立ち寄った。香り付きの消しゴムに目が行く。キウイの香り、しかも緑の半透明で中にタネっぽい黒い粒が入っている。

「こんな消しゴム学校に持ってたらかななか楽しいだろうな。いっこ買ってこうかな？でもお使いのお金だからやめとくか。」

消しゴム以外に面白いものが無いか探してみた。あんまり面白そうなもの無いなあ……。雑貨屋を出ようとして、ある棚の一角で目が止まった。ディズニのキャラクターが何個か置いてある。その中にドナルドダックのぬいぐるみ……。思わず手に取ってしまった。香澄って誕生日7月だったっけ……。ああこんなの香澄にプレゼント出来たらすっごい幸せなんだけどなあ……。

「岩崎くん!!」

「へっ？」

振り向くと香澄が立っていた……。ひえええええっ!!

「せっ、瀬川! なっ、何でもこんな時間に?」

「おかあさんにお使い頼まれちゃってね。岩崎くんは?」

「おっ、俺? こっ今度はいここが遊びに来るんだけど、何プレゼントしようかなあって。」

「ふうん、いくつくらいの子なの?」

「えっ?」

「いや、岩崎くんドナルドのぬいぐるみ持ってるからそれプレゼントするのかなあって思ってた……」

どっひえええええええっ! 香澄にプレゼントするのを想像してたドナルドのぬいぐるみ!!

「幼稚園か1・2年生ならぬいぐるみもかわいいけど、香澄だったらこっちの方がいいな。見てみて!」

香澄が文房具用品売り場に僕を手招きした。

「これドナルドのノート。左下にドナルドがいるだけなんだけど、全体がドナルドの服の色の青と白のストライプでカラーリングされ

ててなかなかおしゃれでしょ!？」

何だかよくわからんがおしゃれらしい。香澄はぬいぐるみよりも実用的なもんの方が好きなんだ。

「あとこんな筆入れなんかもいいかもね。」

右下にタキシードサムの絵が付いている筆入れ。香澄は割と控えめのデザインの方が好みみたいだ。どっちにせよ香澄は僕がいつものプレゼントを思うと思っっているようだ。何か買わないと収拾がつかない……。

「じゃあ俺えんぴつにするわ・・・キティちゃんとマイメロディの一本づつ……。」

「意外とそういう方がいいかもね。」

レジまでえんぴつを持っていった。何故か香澄までついてきた。

「・・・これ二本ください。」

「一応綺麗な包装紙に包んだ方がいいんじゃない。贈り物だし。」ちょっと迷った。実際は送り物でも何でもないんだ。するとレジのおばさんが、

「どうする？彼女の言うとおりにする？」と言った。

かつ、彼女っ!! 香澄が僕の彼女に見えた？僕まだ小学生だよ・・・それにそんな見られ方したら、香澄嫌じゃないだろうか？

横目で香澄をチラッと見た。別に普通の表情だった。

「じゃあ綺麗な包装紙でお願いします。」

包装している時、レジの横にあった映画の割引券に目が行った・・・

「南極物語」。思わず手に取った。

「岩崎くん、そういう映画好きなの？」

「好きというか・・・興味があって。俺イヌとか割と好きだからさ・・・」

実は別にたいした好きでもない。ただ何気なく手に取っただけだ。

レジのおばさんの包装が終わった。

「はい、100円になります。」

「あっ、じゃあこれで。」

「ありがとう。」

僕の手には誰にもやる予定の無いプレゼントが手渡された……。

「じゃあ、岩崎くん、帰るね。バイバイ！」

「バイバイッ！」

香澄と別れ、食料品売り場に行く。何だか寂しさが胸に残る。何でえんぴつなんて買っちゃったんだろう。香澄と一緒にもつという見れたらすっごい幸せだったのに……。でもお店の人、香澄のこと彼女なんて言ってたな。そんなふうに見えるのかな。

＊

家に帰った。おかあさんに牛乳と卵を渡して自分の部屋に行く。結局誰にも渡す予定の無いえんぴつは僕の机の引き出しの中で眠ることになった……。

第6話「Present for you」

7月半ば、ホームルームの時間。8月6・7日、夏休みの期間中にやる林間学校の打ち合わせだった。例年は札幌の郊外にある滝野というところの旧小学校跡で宿泊なのだが、今年は改築があるらしく、同じく札幌郊外の盤溪というところの小学校のグラウンドにテントを張っての宿泊になった。テントは男子3人、女子3人の組み合わせの班をいくつか作るらしい。

滝川先生から班のうちわけの発表だ。

「1班男子。岩崎和生、佐藤大介、和田篤志。1班女子。大町恵、瀬川香澄、松田智子。」

えっ、香澄と一緒に・・・。よっしやあああああ！、何だか信じられない。夜、香澄とテントの中で楽しい話出来たらいいなあ。あっ、まてよ。みんなが寝静まった後、香澄を連れて2人で夜の散歩もいいなあ。

＊

帰り道。僕と信也と伸明の3人。いつも代わり映えないメンバーだ。

「ちっ！お前瀬川と一緒にかよ！？ホント運のいい奴だな！俺は6班で高橋は2班かあ。」

話を返すのもめんどくさかった。実際香澄を好きなのも事実だし。信也や伸明の前では嘘をつく必要もなかった。信也がさらに話を続ける。

「でもなー、俺は最近高橋と二人の愛をさらに深めているんだぜ・・・ジャーン！俺と高橋の交換日記だ！」

いつの間にこんなことを・・・。

「どうだ、和生、伸明、見たいだろ？ちょっとだけ見してやろうか

？ なっ！ なっ！！」

要は見せたくて見せたくてしょうがないらしい。見てみるか……。信也がカバンからノートを取り出した。キティちゃんの顔が何個も散りばめられているいかにも高橋が好きそうなノート。道端に立ち止まって3人で覗き込むように見た。

7月10日

今日はロンのお散歩に行ったあと、ママと一緒にホットケーキをつくりました。はじめてホットケーキ作ったんだけど、粉をかきまぜるのってすごくむずかしいね。まわしすぎて粉だらけになっちゃった。松下くんってホットケーキつくったことある？ こんどつくってみてね。おいしいよ！ あっそうそう！ ホットケーキ食べたあと、おかいものについてキティちゃんの顔のポシエットをかいました。すっごくかわいいよ。こんどみせてあげるね。ではでは。

「なっ！ なっ！ すっげえかわいいだろ？ お前の好きな瀬川は間違ってもこんなとこねえな！」

しっ、失礼な！ お前に香澄の女らしさがわかってたまるか！ しかし高橋って何だか甘ったるそうな感じ。俺はあまり好みじゃないな……。

「俺はなーいつもこのノートの匂いをかいで眠りに付くのだ！ 和生、お前は可哀そうだな！ 瀬川の匂いかいで寝ること無いだろ？ 汗くさそうだけだな。」

匂いはかげないけど、夜になったら毎回毎回……。気付いたら顔が真っ赤になっていた。パンツの中もくすぐったい……。

「お前何顔赤くしてるんだよ。さては毎晩瀬川を想像して……。こいつバカだな、なあ申明。」

「ああああああああああああっ！！」

申明がいきなり叫びだした。そして自分の家の方角に猛ダッシュし

て走って行ってしまった。僕と信也はその場で呆然と突っ立っているだけだった。

「何だあいつ変な奴だな・・・」

信也がポツリと言った。僕は信也と高橋の交換日記の匂いをかいだ。別にただのノートの匂いだった。

＊

翌日の学校帰り。僕は家の近所のスーパーの雑貨屋の前でうろうろしてた。

「今日は・・・7月15日。香澄の誕生日は7月17日だったっけ・・・。プレゼントあげたいなあ。」

朝、学校から出る時、貯金箱の中を見た。ちょうど千円。これだけあったら何か買うことは出来る。でも香澄も僕なんかにいきなりプレゼントなんて渡されたら嫌じゃないだろうか？渡した方がいいのかなあ、いや、渡さない方がいいのかなあ・・・。授業中ずっとそんなことを考えていた。

棚に目をやると、ドナルドダックの顔が右下にデザインされている、ブルーの透明なバインダーがあった。780円。結構高い。でも僕の今の持ち金で十分買える・・・。

店に来て10分経った・・・。まだ買うか買わないか迷っている。買ったとしてもいつ渡そう。明日学校で渡そうか？でもみんなが見てる前だし。僕と香澄2人きりの時に・・・そんなの学校ではありえないし。

20分経った・・・。17日は日曜日だし家で渡そうか？でも香澄の家いまいち良く知らない。いつか屋根から見たビルの下のアパートということしか・・・。

30分経った・・・。

「僕、何か用？」レジのおばさんが僕に尋ねてきた。30分もうろうろしてたから怪しいと思ったのだろう・・・。

「えっ？あつ、あのう・・・このバインダーください！！」

「あつ、これね。」

僕はおばさんの後ろについてレジまでDonald Duckのバインダーを持っていった。まだ香澄に渡すか渡さないかもわからないのに・・・。

「780円ね。」

「はい、これでお願いします。」

僕はレジのおばさんに千円を渡した。その時、おばさんはバインダーを茶色の紙袋に入れようとしていた。

「あの・・・すみません。」

「はい？」

「それ・・・贈り物なんで、可愛い包装紙で包んでもらえますか？リボンもつけて・・・」

「あー、この前の彼女に渡すのかな！？ちょっとお待ちくださいね。」

ギクッ！！顔を覚えられている！しかもこの前の彼女って・・・それだけで顔が真っ赤になってしまった。

「包装紙はどれがいい？」

「あつ、じゃあそのピンクのやつで・・・」

「リボンは？」

「あつ、じゃあその赤いやつで・・・」

何を選んだかは覚えていない・・・それよりも、おばさんに香澄のことを彼女と言われている照れ臭さ。それと、プレゼントを買っているところを他の奴らに見つかるんじゃないかという焦りで頭の中はいっぱいだった。

「はい、おまちどう！ありがとうございます！！」

おばさんから綺麗に包装されたバインダーを手渡された。とりあえずカバンの中に入れておくか・・・。

*

次の日の学校帰り。僕は香澄の後をつけることにした。学校では渡せない。となると家に帰る途中で一人になる時しかない・・・さてよ？一人になったらなったで僕は香澄に渡すことが出来るんだろうか？だいいち何と言って渡す？

香澄が校門を出る。大町恵と一緒に。本間とは一緒にじゃないようだ。うるさいのと一緒にじゃないだけ気が楽だ。10メートルくらい離れて追跡開始！

電柱、車の陰、ブロック塀・・・意外と見つからんもんだ。

(クルッ！)

いきなり大町が僕の方を振り向く！ヤベッ！咄嗟に電柱に隠れる。なにやら香澄と話してる。でもバレなかったようだ・・・。またスタスタと歩き出した。

国道を横切る横断歩道。大町は渡らずに左に曲がった。香澄は渡るらしい。いよいよ一人だ。でも道幅が広いので同じタイミングで渡ったら一発でばれる・・・次に青になるまで待つか。

一度赤になってから再び青に。ダッシュで渡る。香澄はどこだ？あよかった見失わなかった・・・えっ！？

香澄が僕のいる方を向いて立っている。きつ、気付いてたのか？このままでは怪しいので小走りで香澄のどこまで行った。

「・・・よっ！」

「・・・」

「偶然だね・・・」

「さっきから付けてきてたでしょ！？」

「えっ、何で？」

「もう学校出た時から気付いてたよ・・・」

もう最初からバレバレだったのか・・・

「何か用？」

付けられていたのがよっぱど気に入らないのか、相当不機嫌な声だ。やばい。

「あのお・・・」

「何っ!？」

「あのお・・・」

「あのおじゃわからんだろ!!!!!!」

香澄の怒りがバクハツした!やばい!!僕はカバンからプレゼントを取り出した。

「これっ・・・」

「えっ?」

香澄が眉間にシワをよせて不信そうな顔をしてる。

「これっ!!!!!!」

僕はプレゼントを香澄に無理矢理手渡した。そして言った。

「たっ、誕生日おめでとうっ!!」

その瞬間僕は香澄に背を向け猛ダッシュで逃げた。顔なんてとてもしゃないけど見ることが出来なかった。あんなの貰われて迷惑じゃないだろうか?それともあのまま僕がいたらバカにされながらプレゼントを道に捨てて踏み潰されるんじゃないだろうか?それとも明日クラスの連中に言いふらして笑いのものにされるんじゃないだろうか?

いろいろな思いが頭の中をよぎる・・・もう無我夢中で家まで走った。ようやく家にたどり着き玄関のドアを閉めた。帰っても頭の中にあるのはプレゼントを渡せたという満足感と香澄に対する不安だった。

＊

香澄にプレゼントを渡した翌々日。学校で見た香澄はいたって普通だった。ただ僕とは目線も合わせない。避けられてるのか?ただ教室内にもおかしなうわさは聞こえてこない。誰にも言っていないようだ・・・。

学校から帰ってカバンの中から教科書、ノートを取り出す。あれっ

？ノートの切れっ端を折った手紙が入ってる。ひよっとして・・・
恐る恐る開けてみた。

バインダーありがとう。大事に使うね！

香澄

香澄からの手紙だった。すっごく嬉しい！顔が自然ににやける・・・
駄目だ！にやけ顔が止まらない！！

思わず手紙の匂いをかいでみる・・・何だか甘くい香りがするよう
な気がした。

それにしても香澄よろこんでくれたんだな。ああプレゼントして、
ホントによかったあ！！！！

ベットの上でマクラに抱きついてしばらく足をバタバタさせていた。
ああしあわせだなあ。

第7話「林間学校」

「岩崎、支柱をしっかり立ててくれな！」

滝川先生が素晴らしいながらテントをピンと張っていく・・・8月6日、今日から2日間、盤溪のとある小学校のグラウンドで林間学校をやる。僕は香澄と同じ班。最高にラッキーだ。

「ようし、これで全部の班のテントを張り終わったな。じゃあ各自の班のテントの中に荷物を置いておくこと。」

滝川先生の指示でみんなテントの中に持ってきた荷物を入れる。僕はリュックサックだけだからいいか。

「ふうん、岩崎くん割と軽装で来たんだ。」

香澄が僕のリュックサックを見て言った。

「こんなもんだろ？それよりも瀬川、リュックの他に旅行カバンもか！？ずいぶんいろいろ持ってきたな？」

「まずお菓子でしょ？あと蚊取り線香と、トランプと・・・」

何だかずいぶん準備がいい。それにしても格好がアディダスのジャージの半袖短パンと妙に軽装だ。虫に刺されまくるぞ・・・。

（ピーッ！！）

外から笛が鳴った。集合らしい。みんなテントの外に出て、各班ごとに列を作る。

「今から山道を通って、5キロ先の小川まで行きます。」

山道を歩いて自然とふれあうのが目的らしいが、行き先は小川・・・！？何だか意味不明だ。でも香澄と一緒にだからどこだって・・・。小川に向けて列が進み始めた。学校の横にある車一台通れるくらいの舗装されていない道に入る。僕は香澄の横に・・・。

「天気いいなあ・・・」

香澄に一声かける。実際は天気なんてあまり良くない。薄曇りだ。

「まあそんなに暑くなくてちょうどいいんじゃない？」

「俺へびとかいたら捕まえて飼いたいなあ。」

「へびだったらこの辺にいっぱいいるんじゃない？香澄のいところで盤溪で捕まえたへび飼ってた人いたよ。」

「えっ？アオダイショウ？シマへび？」

「そこまではわからないけど。その人へびとかトカゲとか好きでね、いろいろ飼ってたよ。」

どうも香澄はへびとかカエルとかの話題にはあまり抵抗が無いらしい。女の子の中には極端に嫌う子もいるのだが・・・。

やがて道がどんどん細くなり、人一人通るのがやっとくらいの山道になった。辺りにはクマザサが生い茂っている。道のいたるところに木の根っこが飛び出していて、上り下りも相当きつい・・・。行きはまだ体力があるが、帰りもこの道を通るのか・・・。

「せつ、瀬川っ、ハアハア・・・大丈夫か？ハアハア・・・」

「だっ、大丈夫だけど？それより岩崎くん大丈夫？」

やばい、俺は周りに心配されるほど疲れているのか？

「良かったらこれ食べる？」

香澄がリュックサックから取り出した。ポカリスエットの粉末・・・こんなもん食えるか！！でも香澄がわざわざ俺に・・・ここは笑顔で。

「あっ、ありがとう！」

「もうちょっとだから頑張ろうね！！」

香澄が僕の前を歩く。正直ついていくだけで精一杯だ。ハアハア・・・。

＊

ようやく目的地の小川に着いた。ホントにただの小川だった。砂防ダムの下に大きな石がゴロゴロしている川原があって、そこがクラス全員でお弁当を食べるのにちょうどいいスペースだった。滝川先生が連絡事項を伝える。

「今からここでお弁当にします。みんな好きな人同士で食べるよう

に！1時間後にはもう帰りますので、決して遠くに行くようなことの無いように！！」

いっ、1時間しかないのか！？休む暇も無いじゃん！？啞然としていると後から肩を叩くのがいた。信也だった。

「おお、和生。お前ここ来る間ずっと瀬川と一緒にだったな？楽しかったか？」

「かつ、関係ねえだろ！」

「おーおー照れちゃって。まあ一緒に弁当食おうぜ。」

手ごろな石に座って信也と向かい合いながらお弁当を食べる。

「しかし伸明はかわいそうだな。和生のように大好きな瀬川と一緒にいる奴もいれば、伸明のように塾の講習で来れない奴もいるんだからな。」

そうか、伸明は来てないんだ。伸明学校来て楽しいことあるのかなあ。伸明も好きな子がいるんだろうか・・・僕でいう香澄みたいに。

「何お前ばーとしてるんだよ！！さては瀬川のこと考えてたな。」

「・・・違うよ・・・」

「あつ、あそこにいるの高橋じゃないのか？」

4・5メートル前に高橋とその友人2・3人がいた・・・何だか様子が変だ。高橋が今にも泣きそうな顔して何か振り払っている。

「イヤッッ！キャッッ！！」

ハチが一匹たかっているらしい。とその時、信也が立ち上がった。そして高橋のところに駆け寄った。

「たかはしい！大丈夫かあ！！」

高橋にたかっているハチに信也は素手で立ち向かう。なっ、何てことを。信也は右手でキャッチした・・・

「高橋、もう大丈夫！俺がこうやって捕まえ・・・いてっつつつつっ！！！！！！」

信也は捕まえて現物を高橋に見せるつもりだったらしい。しかし予想通りというか何というか思いつきり親指をハチに刺された。信也を刺したのはミツバチらしい。親指に針が思いつきり残っている。

「早く先生に見せた方がいいよ！」
高橋が信也を連れて滝川先生のところに行った・・・信也もハチに刺されたとはいえこれで満足だろう。多分帰ってから自慢話をたっぷり聞かされるが・・・。

＊

言うまでもなく帰りは行きよりも数段きつかった。お弁当を食べて1時間程度の休憩で帰り・・・疲れなんて全く取れない。おまけに上り下りの激しい山道。幅は50センチくらい。右は山頂、左は尾根、周りはクマザサだらけ、蚊のような虫が山ほど飛んでいる。40分くらい歩いた時だった。

「岩崎くん、あそこの岩の上に寝てるのへびじゃない？」

香澄が言った。見ると右手のクマザサの茂みから飛び出した岩にへびが一匹とぐろを巻いている・・・マムシだ。

「あれはマムシだよ・・・毒へびだから飼えないよ。」

「えー毒へび！きゃーん、こわーい！！！」

えっ、香澄？香澄が何か恐がっているとこなんて初めて見た。顔をしかめつつらして身体を引いてる。何かそんなとこ見せられると僕・・・。

「近づかなければ平気だよ、さあ行こうぜ。」

香澄にそう言って僕は歩き始めた。ちよつとだけいい気分。そうして4・5分歩いた時だった。左の斜面の木の下に何かいる！アオダイショウだ！！斜面に沿って下に逃げてる・・・どっどこだ！木の下に近づいたその時！

（ザザザザザザザザザザザザザザザツツツツツツツツ！！）
しっしまった！クマザサに足をすべらせた・・・気が付くと道から4・5メートル下に転落していた。

「大丈夫かっ！！」

滝川先生が僕のところへゆっくり降りてくる。

「だっだいじょう・・・いっ痛っ!!」
左足をくじいてしまった。何でこんな時に、せっかくの林間学校なの・・・。

＊

結局滝川先生に肩を借りて僕はテントまでたどり着いた。テントの中で保健の先生が持ってきた湿布と氷で足を冷やす。

「大丈夫か？今日は一日無理しないで休んでおけ。」
滝川先生が心配そうに僕に声をかける。

「すいません、こんなことになってしまっ・・・」
実際のところ大したことなかった。確かに赤くなっではいるが、余裕で歩ける。けどあそこまで周りから心配されたら大丈夫だと言うに言えなかった。痛くて歩けないふりをしているしかなかった。外では他のメンバーが夕飯の準備をしている。僕もやりたかったなあ・・・。

「岩崎、カレー持ってきたぞ。瀬川が作ったんだ。」

滝川先生が紙皿にカレーを盛ってテントの中にいる僕に届けてきた。香澄が作ったのか？これは食べなくては・・・何だかカレーのルーが塊になっている。見た目はまずそうだ。一口食べてみる・・・香澄が作ったカレーってこんな味なのか。うまいまずいは別にしてこれが香澄の味なんだと噛みしめながら食べた。

「これからキャンプファイヤーがあるんだけどお前はテントで休んでるか？」

「はい、そうします。」

行きたくないわけでもなかったが、何だかひとりになりたかった。ただただボーッとしてたかったのだ。香澄の想像に耽りながら。

外から「今日の日はさようなら」が聞こえてくる。キャンプファイヤーをかこみながらみんな歌っているのだろう・・・。

・・・いつまでも 絶えることなく 友だちでいよう・・・

僕と香澄は友だちなのかな？ひよっとしたら友だちにもなってないかもしれない。でもこれからずっと一緒にいたいな。中学になっても、高校になっても、大学になっても。そしていつの日か・・・なんてこと来るのかな。

＊

「和生、大丈夫か？」

同じ班の佐藤大介だった。どうやらみんなキャンプファイヤーが終わって戻ってきたらしい。僕の想像の時間も終わりだ。

「岩崎くん、元気そうじゃん!？」

香澄だ。何だか満足したような顔をしている。キャンプファイヤーがよっぽど楽しかったのだろう。香澄に続いて班のメンバーが全員帰ってきた。

「ねえねえ！今から大富豪やらない!？」

香澄がカバンからランプを取り出して言った。

「おお、そうだな！やろうやろう!」

回りも興奮している・・・。

正直愕然とした・・・ええ？大富豪？僕あのゲーム大嫌いなのにいかすみい！余計なこと言うなよ・・・。

1回目。香澄が真っ先にあがる。

「いえーい！いちばーん!!大富豪大富豪!」

どうやら香澄は大富豪が恐ろしく強いらしい。僕はというと・・・最後までカードが残る。大貧民だった。

8回目。またもや香澄のカードが一番先に無くなる・・・。

「よっしゃっ!!あー勝ちすぎかな!!」

嫌味を一発かましてゴロンと横になった。俺は・・・今回も大貧民なのか。

しばらくして横からいびきが聞こえてきた・・・香澄だった。仰向けで左腕を頭の上に投げ出し、右腕は口元を覆っている。ヒザを立

てながら足を開いている・・・。

「・・・女の寝かたじゃないな。」

大介がポツリと言った。まあ行儀のいい寝かたではないなと僕も思った。

今回も僕の大貧民確定かと思ったその時・・・

「おい！お前ら今ヒマか！？」

いきなりテントのファスナーを開け誰か入ってきた。本間だった。

「これから15分くらい歩いたところに墓地があるんだってよ！みんなで肝だめし行かねえか！？」

「おー！行く行く！！和生、お前も行くだろ？」

大介が興奮しながら言う。

「俺は止めとくよ。」

正直墓地や霊は苦手だ・・・。

「そうだな、お前が行っても足手まといになるだけだしな！」

本間が茶化す。何っ！？と思ったが、考えてみれば僕は足をケガしてるフリしてるんだっつけ？そう思われてもしょうがない。

「わっ、わたし達も行くのかな？」

女の子達も行ったそうだ。

「よっしゃ！！これで決まりだ！みんな外に出ろ！！」

本間の叫び声とともにみんな腰を上げ靴をはき出した。

「ねえ？香澄ちゃん寝てるけど起こす？」

「放つとけよ、そいつ一度寝るとテコでも起きないぞ。」

本間が半ば呆れ顔で言った。

えっ？テントの中で、僕と香澄とふたりっきり・・・！？

本間のかけ声にひかれみんな一斉に墓地に行ってしまった。

テントの中には僕と横たわってる香澄・・・散乱したトランプが落ちて着かない気持ちをやよりいっそう大きくしていった。

第8話「テントの中で」

僕の真横に香澄が寝ている・・・ジャージの半袖短パンで。何だつてそんな格好なんだ・・・。

辺りにほんのりと甘い香りがする。香澄の方から漂ってくる。

心臓の鼓動が速い。香澄を見てるだけでどんどん速くなる。

キスってどんな感じなんだろう？香澄の顔をマジマジと見る・・・。眉は割と濃い目。まつ毛が結構長いんだ。鼻はちよつと大きいのかな？肌はどちらかと言えば白い方。口は・・・右腕で覆われてて見えない・・・。

さすがに・・・キスは出来ないな。

目線をもう少し下にずらす・・・胸がちよつとふくらんでいる。

香澄のおっぱいってどんな感じなんだろう・・・見てみたいな。さわってみようかな。

さすがに・・・ちよつと。

さらに目線をもう少し下にずらす・・・ヒザを立てながら足開いてる。

香澄のあそこってどんな・・・。

心臓の鼓動がものすごく強くなっている。おちんちんがものすごく硬くなってる・・・。

ちよ、ちよつとだけなら、ちよつとだけならわからないよね？

香澄の右の太ももから短パンをつまんでちよつと覗いてみた。白いパンティが見えた。

息が苦しい・・・何でこんなにハアハア言ってるんだろ？

もっ、もうちよつとだけ、もうちよつとだけ・・・。

パンティもつまんで開いてみた。割れ目の周りにうっすらと黒いうぶ毛が生えていた。

・・・僕なんてまだ何も生えてないのに・・・

息がどんどん荒くなる。もう駄目、我慢出来ない。

親指と人差し指でパンティをつまみながら、中指で香澄の割れ目に指を入れた。そのままぞってみる・・・ヌルヌルする。

その時だった。香澄が左に寝返りをうった。反動で親指と人差し指がパンティから外れる。

きっ、気付いた？ やっやばい！ どうしよう・・・。

香澄は体勢を変えるとそのままピクリとも動かなくなった。

鼓動が止まらない。息が乱れる・・・口は半開きのままだ。ふと中指を見てみる・・・思いつき濡れている。しずくが指の先から落ちそうになっていた。

匂いを嗅いでみる・・・ちよっときつめの匂い。でも香澄のあそこ
の匂い・・・香澄のあそこ・・・。

左手で自分のパンツのゴムを広げた。そして香澄のあそこで濡れている右手の中指をおちんちんの先に押し付けた。

「くっ!!」

痛い!! でもくすぐったい。かなり強く無理矢理指を押し付ける・

・香澄のと混ざり合って、音をたてながら指が動く。

座り込んで前かがみになっている。手がもう止まらない。涙があふれて止まらない。どうしようこんなことになっちゃって・・・

「かすみい!! かすみい!!」

香澄の名前が勝手に口から出る。おちんちんが痛い・・・でも止まらない。

その時・・・外から足音が聞こえる! まずいっ! 僕は横になり咄嗟に寝たふりをした。誰かがいきなりテントのファスナーを開ける。

「おーいみんな寝たか? へっ? 瀬川と岩崎だけか? みんなどこ行っ
たんだ?」

滝川先生だった。夜の巡回らしい。テントのファスナーを閉め出て行った。

もうさすがに今日は動けない。今度起き上がったら香澄に何をしてしまうかわからない。自分で自分が恐くてしょうがない。しかもさ
っきの滝川先生のようにいつ誰が来るかわからない・・・。

外で滝川先生の怒鳴り声が聞こえる・・・墓地から戻ってきたメンバーが怒られているらしい。もうじきテントに戻ってくるだろう。もうおとなしく寝てるしかない。いつもの僕でないから余計に・・・。

＊

墓地から帰ってきたメンバーは、テントに戻った後みんなすぐ寝てしまった。結構疲れていたみたいだ。ただひとり僕だけがいつまでも眠れずにいた。香澄の中に入れてることばかり想像してしまう。しかもホントに香澄のが・・・でも手でさわれない。さわったら間違いなくテントの中で自分でやってしまう。他のやつらにそんなとこ見られたら・・・。

空が明るくなってきた。時計を見た。5時2分。もうどっちみち寝れない。今から寝ても6時半の合同でのラジオ体操には絶対起きられない。ひとりテントを出た。

グランドの横にある蛇口に行った。ひたすら手を洗う・・・香澄と自分のとで汚れた自分の手。しゃかりきになって洗う。4分、5分・・・ずっと洗い続けた。

次は顔だ。大量の水を使い周りが水びたしになる勢いで洗う。大粒の涙を流してベタベタの顔。とても人に見せられない表情だったに違いない。しっかりしろ和生！こんな顔絶対誰にも見せちゃいけない！でも・・・香澄には見てほしい。情けない自分も全部見て欲しい。ああああああもう！何なんだ僕は！！

タオルが無いので着ていたTシャツで顔を拭く。テントに戻ることにした。戻るとテントの横にある石に誰か座ってる・・・香澄だった。

恐い・・・夜のこと、寝たふりしながら全部知ってるのでは？すごい怒ってるのでは？逆に泣かれたらどうしよう・・・みんなにバラされるかもしれない・・・。

「おはよう・・・」

香澄から声をかけてきた。

「・・・おはよう。」

「昨日早く寝たから、今日やけに早く目覚めちゃった！岩崎くんもずいぶん早起きだね！」

昨日の夜のこと全然気付いてないのか？僕はお前にずいぶん凄いことやっちゃったんだぞ！？」

「どうしたの？そうだ、早起きついでに散歩でもしない？」

僕は無言でうなずいた。香澄が歩き出す。どうやら昨日行った山道の方らしい。僕も後ろからついていった。

「そういえば、左足大丈夫？昨日はずいぶん痛そうだったけど。」

「・・・もう大丈夫だよ、普通に歩けるようになったし。一晚寝てずいぶん良くなったよ。」

香澄と二人つきりで散歩・・・恋人同士ってこんな気持ちなのかな。太陽が眩しい。香澄の髪に日の光が射して輝いている。顔うずめてみたい・・・。

「あつ、こんなところにアサガオが咲いてる。」

「・・・ヒルガオだよ。葉に毛が生えてなくて、三角だろ。」

「ふうん、これがヒルガオなんだ。」

「アサガオと違ってヒルガオはおおかた野生だよ。仲間を増やすのもタネじゃなくて根っこ。」

「岩崎くんって生き物好きなの。」

「・・・何で？」

「いや、昨日もヘビの話なんてしてたから。」

「・・・うん、ちっちゃい頃から植物や動物、虫に限らず生き物が好きなんだ。一度自分の部屋をいろんな昆虫の飼育ケースで埋め尽くしてみたいな。カブトムシやカマキリやキリギリスとか。ベランダにはいろんな植物、いや、畑か何かで育ててみたいな。あとはヘビとかトカゲとか・・・」

こんなこと他人に言うのは初めてだった。他の人に言っても「あつ

そう」とかあるいは無表情で終わってしまうから。でも香澄には聞いて欲しかった。素顔の自分を少しでも出したい……。

「ふうん、そうなんだ。昆虫採集とかはしないの？」

「死んだ虫はあまり興味が無いんだ。」

「ちよつとした昆虫館みたいだね。香澄もそんな部屋見てみたいな。」

「……香澄。何で僕にはいつもやさしいんだ？何で僕にはいつも笑顔なんだ。僕は昨日お前に凄いことしちゃったんだぞ。覚えてないの？」

「瀬川、もうそろそろ戻ろうか？みんなもう起きてるかもしれないし。」

「そうだね、今何時？」

「俺時計持っていないから知らないよ。」

「香澄も持ってない……」

とりあえず二人そろって無言で校庭にダッシュした。着いたときにはもう遅かった……全員がラジオ体操の深呼吸をしているところだった。

「岩崎と瀬川が二人で散歩してるぞ！」

「うわっ、熱いねえ、ヒューヒュー！」

「岩崎足ケがしてたんじゃないのか？走ってるぞ？」

クラスメイト全員からざわめきが起きた。

「こらっ、お前たち体操もしないで何やってたんだ！！」

滝川先生からカミナリが落ちた。

「すっ、すいません！実は昨日の山登りでハンカチ落としちゃって、たまたま起きてた岩崎くんと一緒に探してもらってたんです！」

香澄が咄嗟のアドリブ。うまい！

「それで見つかったのか？」

「いや、この辺には無かったみたいです。」

「……とりあえず自分の場所に戻れ。」

軽い朝食の後、テントの解体が始まった。それからバスに乗ってウ

チらが通ってる小学校の前で解散・・・もう何をしたかほとんど覚えていない。頭の中は昨晚のことばかりだった。ずっと心臓の鼓動が速いまま。家に帰って両親の顔すらもまともに見れなかった。

第9話「おびえる日々」

林間学校が終わった後、僕は毎日毎日おびえながら生きていた。香澄は本当は林間学校の夜のことを知っているんじゃないか？誰かに言ってるんじゃないか？

家で電話のベルが鳴るたび心臓が止まりそうになった。外から帰ってきて家の玄関に入る時、恐くてたまらなかった。香澄の件がひよっとしたらウチのおとうさんおかあさんの耳に入ってるかもしれない。

けど僕が思ってたようにはなかった。そうして夏休みが終わった。

＊

（ピンポン！）

「和生！信也くんが向かえに来たわよ！！」

「・・・はい。」

信也が迎えに来た。今日は2学期初登校。

「オッス和生！学校行くぞ！！」

学校への行きなれた道・・・でも景色が何だか違って見える。テントでの一件以降僕の周りの世界が変わってしまった・・・。

「和生お前何だか元気ないぞ。あつ、でも瀬川にあったら元気100倍になるか！何てったって朝二人で散歩してたくらいだからな！」
香澄に会うのが恐くて恐くてたまらない。ひよっとしたら先生に言いつけてるかもしれない。クラスみんなの耳にも入ってるかもしれない。ものすごく怒られるだろう。クラスの全員から仲間はずれにされいじめられるだろう・・・。

教室に入る。特に夏休み前とは何も変わらない。いつもと同じ机、いつもと同じ黒板、いつもと同じクラスメイト・・・僕の心の中だ

けが変わっていた。

香澄を見つけた。本間と何か話している。何だか凄く楽しそう。夏休み中の話で盛り上がっている。僕が近寄ってわざわざ声をかけるのも変だし……。ひょっとしたら僕の話か？ テントの話でもしているのでは……。

始業式ということもあり、体育館で校長先生の話を聞いた後、教室に戻って、宿題と自由研究を提出してこの日の学校は終わった。昼前だった。

「なあ、和生、俺んちに来ないか？ お前に見せたいものがあるんだよ。」

教室から出る時、信也が声をかけてきた。

「あー、そうだな行こうか。」

「何だ今日は朝から気抜けてるな……。まあ俺んち来たらド肝拔かすぜ！」

＊

「ジャーン！！」

ホントにド肝を抜かされた。信也の家に行ってテレビの前で見たもの……。それはファミリコンピューター、略してファミコンだった。ファミコンなんて先月発売されたばかりのはず。もう手に入れたのか！

「へっへーっ！ オヤジに買ってもらったんだ。まだカセットの方はドンキーコングしか無いけどな。」

「……しっ、信也、やってみてもいいかな？」

「あーどうぞどうぞ！」

信也がテレビの画面を切り替える。ファミコンにドンキーコングのカセットをセットして電源を入れる。ドンキーコングの表示が画面いっぱいに出てきた。

「すっ、すげえっ！！」

スタートボタンを押す。方向キーでマリオが走る！Aボタンを押す！マリオがタルを飛び越える・・・こんなゲームセンターでしか出来なかったゲームが家のテレビでやれちゃうのか！！ぼっ僕もクリスマスに絶対買うぞ！！

それから2時間ほど、ゲームに夢中だった！ゲーム&ウォッチなんて比べ物にならない。こんなにリアルにテレビゲームが楽しめちゃうのか！？しかもゲームセンターと違って金なんかいらぬ。ただただ興奮しっぱなしだった・・・。

「和生、そろそろ休んだ方がいいんじゃないのか？」

「そっそうだな。目も疲れたし・・・」

「実は今日はファミコンだけじゃないんだ。もうひとつお前が喜ぶもんがあつてよ。」

信也が茶色の封筒を持ってきた。そして中から写真を出した。

「・・・！！」

驚いた。香澄の写真だった。格好からしてこの前の林間学校みたいだった。日の光が射した中で満面の笑顔でピースしてる・・・こんな写真いつの間に。

「へっへー、驚いただろ。実は俺内緒であの林間学校にカメラを持ってきたんだ。そん中の一枚がこれだ。欲しいか？」

正直死ぬほど欲しい。香澄の写真なんて一枚も持ってなかった。しかも信也が撮ったんだろうけど、写真うつりがものすごくかわいい。

「いいいらねえよ。」

「あっそうか？じゃあやらねえよ！」

「・・・」

「遠慮するなよ！？顔が欲しがってるぞ！タダでやるからよ！」
「タダ！？」

「この前高橋撮るためにカメラ持ってたんだけどよ、横から瀬川が来ていきなりポーズ取ってるんだよ。しゃあないから1枚撮ったけど、俺別に瀬川の写真なんていらねえしよ。」

僕は信也から香澄の写真を受け取り、そのままカバンの中に入れた。

「最初っから素直にもらっとけばいいのによ！それにひきかえどうだ！見てみる！！」

信也が茶封筒の中から写真の束を取り出した。20枚近くある。全ての写真に高橋が写っていた。

「かわいいだろグフフ！中でもなあ、俺はこの写真がお気に入りなのだ！！」

野原の中で高橋がシロツメクサの花束を持ちながら微笑んでる写真。まあ悪くはないけどさっきの香澄の写真の方が上かな・・・モデルが違いすぎるよ。

「お前にやった写真も構図はいいけどな。でもあれはモデルが悪いな。」

信也が僕と全く逆のことを言っている。メガネかけた方がいいんじゃないの？

「ファミコンはまた明日でもやりに来いよ。俺はこの写真で高橋とやってるところ想像して今からオナニーでもするぜ！」

「じゃあな。俺も家帰るわ。」

＊

それから何気なく3日が過ぎた。その間香澄とは一度も口を聞かなかった。いや、話す機会が無かったという方が合っているかもしれない。学校が終わって、家の玄関を開けるのが恐かった。香澄が告げ口しているのではないかと。朝、学校の教室の扉を開けるのが恐かった。香澄がクラスの連中にいいふらしているんじゃないかと・・・。けど誰にも言っていないようだった。周りの反応はいつもとおり・・・僕ひとりが日々おびえていた。

4日目のことだった。たまたま休み時間にトイレに行く時、香澄とすれ違った。

「岩崎くん、話があるの。放課後に体育館の裏まで来てくれる？」
「えっ、俺？」

「頼むわ。ここでは言えないの。」

背筋が凍りついた。香澄はそれだけ言うた。スタスタ教室に戻っていた。やっぱ香澄は知っていたのか？それにしても僕を呼びつけてどうするつもりだ？怒りをぶつけるのか？それとも周りに言うぞと脅されるのか？それを考えるといてもたってもいられない……。

＊

「おい、和生、一緒に帰ろうぜ！今日もウチでファミコンやらねえか？」

「ごめん、ちょっと今日滝川先生に呼ばれてて……」

信也の誘いをウソを言って断る……これから香澄に会わなくてはいけない。放課後……体育館の裏……想像するだけで恐い。香澄は僕の顔をにらみつけるだろうか？それともいきなり泣き出すだろうか……。

重い足取りで玄関に向かう。歩くスピードが他の人たちの倍くらいだろうか。とにかく足が進まない。玄関で外靴に履き替える。ものすごい遅い。上履きを下駄箱に入れて外靴を取り出す……スローモーションのような動作。いつも靴のかかとなって踏み潰しているのに、しっかりと足をおさめる。そこから体育館の裏へ……。誰かが残ってバスケットでもしているのだろうか？体育館の中からドリブルの球の音が聞こえる。それと同じように僕の心臓の鼓動も速くなる……もう顔も泣きそうだ。

徐々に香澄の姿が見えてきた。香澄はどんな表情してるんだろう？近づくにつれ顔が見えてきた……何だか不安そうな顔をしている。やっぱテントでの一件の話なのか？もう駄目だ。逃れることが出来ない……。思い切って香澄の目の前に立った。

「……なっ、何の用？」

僕がそう言うと、香澄は何も言わず自分のカバンの中に手を入れた。そして……

「ジャーン！南極物語の映画のチケット！！岩崎くん前見に行きたがってたでしょ！？行こうよっ！！」

「・・・・・・・・・・それも終わったんじゃないっけ？」

「4丁目の映画館でまだやってるよ！」

「・・・・・・・・・・！？」

「この前おとうさんの知り合いの人からもらったんだ。しかもチケット2枚。今日の日曜日2人で一緒に行かない？」

「2人ってもう1人は？」

「香澄と・・・・」

こっ、これってデートの誘い！？しかもウチらまだ小学生だぞ！！こんな街中に出て2人っきりで映画なんてありなの？

「いやゝすごくうれしいんだけどさぁ・・・・・・・・うれしいんだけどさぁ・・・・・・・・行こうか！！！？」

考えに考えたのだが、行くっていう答えしか思い浮かばない。

「よしじゃあ決まり！！じゃあ今日の日曜日、10時、大通駅降りたところの不二家のペコちゃんの前でね！！」

「よっしゃ！！あー日曜が楽しみだなあ！！じゃあ瀬川またなっ！！」

「じゃあねっ！」

香澄から走って離れる。いろんな思いがいっぱいこみ上げてくる。ちょっとあの場には一緒にいれない・・・・・・・・顔がにやけて止まらない。

香澄が僕を映画に誘ってくれた。しかも二人っきりで・・・・もう嬉しくて嬉しくてたまらない。香澄どんな格好で来るのかなぁ？それより僕どんな服着ていこう？映画見た後はどうしようかなぁ？どこかに散歩でも？それともそのまま真っ直ぐ帰ることになるのかなぁ？それにしてもあのテントでのこと、香澄は気付いてないのかなぁ？気付いていてもいなくても、僕を映画に誘ってくれた。それだけでもう僕は・・・・・・・・。

家の玄関に入る。誰もいない。カバンの中から先日信也にもらった

香澄の写真を取り出す。信じられないほど可愛い香澄の笑顔。思わず胸に押し当てた。

・・・これからも僕ずっと夢見てもいいよね・・・。

第10話「ぼっぴーんの雲の下で」

日曜日の朝。9時15分・・・。

「おかあさん、俺、信也んち行ってくるわ。昼ごはんは適当なもん食べるからいらない。」

「あら珍しいわね、休みの日に遊びに行くなんて。行ってらっしい・・・」

おかあさんに一言言って家を飛び出た。今日は香澄と映画・・・考えただけで胸がワクワクする。朝起きてから今までいろいろあったことか・・・。

6時に起きて服を決めた。ジャージなんて論外。Gパンあたりが無難かな？上はどうしよう？この白地で胸に柄のはいったTシャツがラフな感じでいいかな？でも8月の末でこの格好は変かな？選ぶだけで楽しい。1時間かかった末、結局GパンとTシャツに。ちょっと寒そうだけどまあいいか・・・。

7時、髪をセットした。いつもはただの直毛・・・ちょっと分け目を入れたほうがいいのかなあ。左側？右側？どっちもうまく行かない・・・ええいいつもと同じでいいや！ヘアトニック？何だかわからんけどこれでも髪につけとくか！

7時半、もうすることが無い・・・。香澄と待ち合わせの時間は10時。おとうさんもおかあさんも日曜なのでまだ寝ている・・・テレビでも見るか・・・駄目だ、香澄のことしか頭に浮かばない。

8時半、おかあさんが起きてきた。髪にヘアトニックつけたのがバレた。どんなものか試してみたかったと適当にごまかした。

そしてようやく外出。最寄の地下鉄平岸駅まで自転車で猛ダッシュだ！！10分で着いた。さてさてここからだ。僕は1人で地下鉄に乗ったことがなかった。ちょっと不安だ。券売機にお金を入れて切符を買う。自動改札機に通す。入れ損ねて鳴るんじゃないだろうか・・・何の音もなく無事に通った。ホッ！

そこから大通駅まで地下鉄に揺られる・・・多分時間にして10分も無いんだろうけどすごく長く感じる。もう少して香澄に会える。もう先に着いてるかな？それとも僕の方が先かな？・・・でもだまされてたらどうしよう。ひとりですつと待ってるのかなあ。

大通駅の改札を抜け、地下にある不二家の前に・・・香澄だ!!

「ごめーん、待った!？」

「いや、まだ5分前だよ」

ぼわっとした白い生地に着襟のセーラー服。下もやや大きめの白い綿パン・・・上下セットなのか？ドナルドダックみたいな格好だけど、香澄にはまってものすごくかわいい。こんなかわいい女の子と一緒に映画に行けるなんて・・・。

「さあて映画館まで出発進行!!」

香澄がそう言って鼻歌まじりで歩きだした。僕も横に並んで歩く。ものすごい笑顔。香澄のこんな笑顔見たことない。信也からもらった写真の顔よりずっと生き生きしてる。

「香澄ねえ、今朝の6時に起きちゃった。だってすごく楽しみだったんだもん!」

「あれ!？この映画そんなに興味あったっけ!？」

「まっ、まあ世間であれほど騒がれてる映画だからね!」

札幌の大通・・・正直両親としか来たことがない。こんなところ歩いてるだけで、道に迷うんじゃないか？悪い奴にからまれるんじゃないか？交通事故にあうんじゃないか？なんていろいろ考えてしまう。それにしても香澄は知ってるかのように道を歩く。何度か来たことあるのかなあ・・・??

＊

映画館は割と近かった。香澄が受付にチケットを2枚渡す。

「ねえ、岩崎くん。どこでもいいから席2つ取ってて。香澄何か食べ物買ってくるね!」

真ん中あたりにするか・・・真ん中の後ろ側。しばらくして香澄が来た。飲み物2つと大きなポップコーン1つ。

「オレンジジュースとコーラ。岩崎くんどっちがいい？」

「俺コーラの方がいいな。」

「じゃあ香澄はオレンジジュースね！あとポップコーン買ってきたから一緒に食べよう！」

香澄と1つのポップコーンを分けながら食う・・・それだけでも何て素晴らしいことか。信也は間違えても高橋なんかと1つの食べ物と共有したことなんて無いだろう。味わって食べるか。

映画が始まった。左隣に香澄がいる・・・それだけで胸がドキドキしてたまらない。甘い匂い・・・香澄の匂いだ。

映画の内容が全然頭に入らない。山ほどいるイヌがソリを引いている。みんなでどこかに行くのか？・・・香澄のことしか考えられない。

イヌが首輪でつながればなし。次の調査隊が天気が悪くて来れない・・・。香澄の手が僕の手に触れた。僕の左手の小指が香澄の右手首に触れている。もうずっと触れたままでもいい。香澄の手、握りたいなあ。

「・・・ポップコーンあるよ。」

香澄が小声で言ってきた。

「・・・あつ、じゃあ食べようか。」

ポップコーンのことなんて忘れていた。香澄の右手が僕の左手の小指から離れ、ポップコーンのカップを持った。もうちょっとつながっていたかったな・・・。

香澄が右手で持ったカップで差し出すポップコーンを、僕は右手で、香澄は自分の左手で取りながら食べていた。

香澄がポップコーンを取ろうとした左手に、僕の右手が偶然重なる・・・駄目、もう我慢出来ない。そのまま香澄の左手を握り締めた。

「ごめん、ごめん、ちょっといいからこのままでいさせて・・・」
香澄にお願いしてる。しかもものすごく甘えた声で・・・

香澄は何も言わない・・・僕は香澄の左手を握ったま自分僕の左膝に乗せた。ちよつとひんやりしてて、手の平が汗ばんでる香澄の手・・・もうずっと握っていたい。許されるならせめて映画が終わるまで・・・。

2. 3分後、香澄が僕の膝から手を抜いた。そしてそのままオレنجジュースを持って飲み始めた・・・僕の夢はオレنجジュースの前にはかなく破れ去った。画面ではイヌたちが首輪を外そうと必死でもがいていた。

＊

「うーん！映画よかったね！！」

館内が明るくなって、香澄が背伸びをしながら言った。手を握ったことは何とも思っていないのだろうか・・・。

「何だかおなか空いちゃったな。ハンバーガーでも食べに行かない！？」

あれだけポップコーン食ってさらにハンバーガー！？そうだ思い出した、香澄は大食いだったっけ！？

「うんいいよ・・・」

返事はしたもののハンバーガーなんてほとんど食べに行ったことが無い。昔の記憶をたどってもマクドナルドにおかあさんと一緒に数回行ったことがあるくらいだ。まあここは香澄にまかすか。

香澄に先導されながら近くのマクドナルドに行く。それにしても香澄は知ってるかのように店に入っていく。何度か来たことあるのかなあ・・・？？

「チーズバーガーとマックシェイクのバナラください。岩崎くんは？」

「あっじゃあチーズバーガーとポテトとマックシェイクのバナラ・・・」

結局フライドポテト以外、香澄と全く同じものを頼んだ。

「その席に座ろう。」

香澄が2人用のテーブルを選ぶ。香澄と2人で食事・・・学校の給食を除いて家族以外の人と食事するなんて初めてじゃないだろうか。しかもその相手が僕の好きな女の子。

「岩崎くんこういうところ来るの初めて？」

「初めてじゃないけど、家族以外の人と来るのは初めてだよ。」

「実は香澄もなんだ。でもこんなもたまにはいいじゃない？」

何だ香澄も初めてなんだ・・・何だかちょっとホッとした気分。

「ねえ、松下くんって高橋のこと好きなんでしょ？たまに2人でこんなところ来てるのかな!？」

えっ？何を唐突に信也と高橋の話を??

「・・・うーん、どうだろうなあ。あの2人交換日記までしてるくらいだからなあ。」

「えーっ、そうなんだ！高橋って交換日記好きだね・・・」

「えっ？信也以外の男ともやってるの？」

「今はどうか知らないけど去年は2・3人の男子とやってたみたいだよ。しかもあのコそういうの他の女の子にも見せるでしょ!？」

「・・・割とおとなしそうに見えるんだけどなあ。」

「結構好きみたいよ、そういうのが。香澄は高橋とはあまり親しくないからよくわからないけど。」

何だか信也の想像している、清純なイメージともちょっと違うみたいだ。何だか信也にはちよつと言えない。

香澄はどんなタイプが好きなんだろうか・・・。

「瀬川から見たら信也ってどんな感じなの？」

「うーん・・・ここだけの話で言うところとちょっと苦手かな。何だか暑苦しいし、しつこそうで。でも松下くんのこと好きなコ結構いるよ。面白いし男っぽいんだって。」

「えっ、それ誰だれ？」

「んー、それはちよつと言えないなあ・・・」

「ひよつとして高橋？」

「高橋は川端くんのことが好きって噂だしなあ・・・でも高橋はいろんな男の子好きみたいだからよくわからない。」

川端・・・川端昌明。僕の大嫌いな昌明だ。高橋ってあんなのが好きなの!?

「瀬川は?」

勝手に言葉に出てしまった・・・。何聞いてるんだろ僕は?自分のこと言っただけなのかい?それとも他の男の名前聞いてショック受けたのか?どっちにせよ心臓がドキドキする。早く答えが聞きたい・・・。

「香澄は・・・うーん、言えないなあ。」

何かたくらんだかの如くニタリツとした顔で言ってくる。

「誰にも言わないからさあ、教えろよ!」

「じゃあ岩崎くんは?」

ドキツとした。それと同時に自分の顔がどんどん赤くなるのがわかる。耳まで熱い・・・。

「いっ、言えねえよ・・・」

「じゃあ香澄も言えないっ!!」

「きたねえなあ、ここまできたんだから言えよ」

「あー香澄はシブがき隊のヤツくんが好きかな!」

「芸能人じゃねえよ!!」

「チーズバーガーさめちゃうよ!食べたらず」

「・・・」

上手い具合にはぐらかしやがって・・・僕は一口もつけてない冷えたチーズバーガーに口をつけた。

「ポテトいっただきーっ!!」

香澄が僕のフライドポテトにいきなり手を伸ばした。

「それ俺が頼んだんだぞ!勝手に食うんじゃねーよ!!」

「まあまあそう怒らないで!じゃあ岩崎くん、あーん。」

えっ、僕に食わせてくれるの?でもみんな見てるじゃん。

「あっ、いらなの?じゃあ香澄がたべよっつと!」

結局香澄に食べられた。まあ1本だったら・・・。しかしその考えは甘かった。次から次へと香澄の手がポテトに伸びていく。あつという間に半分くらい無くなってしまった。

「あー何だかおなかいっぱいになっちゃったなあ。シェイク半分くらい残っちゃった！岩崎くん飲む？」

香澄が何気ない顔で言う。一瞬チーズバーガーを嘔きだしそうになった。それって間接キスじゃん！？マジか？

「冗談だよ冗談！！さあおなかもいっぱいになったし、散歩でも行こうか！」

僕まだ食べてるんだけどなあ・・・4分の1くらいあったチーズバーガーを無理矢理口の中に押しこみ店を後にした。

＊

「香澄ホントは中島公園の方が好きなんだけど、こっからじゃ遠いし大通公園にしようか。」

行き先まで勝手に決められている・・・まあいいか。家族以外で街中なんて歩いたこと無いし、ここは香澄にまかせた方がいいみたい。大通公園の真ん中。どでかい噴水がある。そしてその周辺にハトが山ほど群がっていた。

「ポップコーン買いに行こうっと！」

香澄が唐突に言った。

「おっ、お前まだ食うのか！？しかもポップコーンなんて映画館でも食ったじゃん！？」

「香澄が食べるんじゃないよ！ハトにやるの！！」

「そんなもつたいないことやめろ！」
と僕は言ったが香澄はお構いなしに屋台に並び、おばさんに金を渡してポップコーンを受け取ってきた。

「ほーら、おたべーっ！！」

香澄が地面にポップコーンをひとつかみ放る。ハトが7・8匹群が

ってきた。

「あーあーもったいねえ。」

呆れ顔で言っている僕の目の前に香澄はポップコーンのカップを突き出してきた。

「・・・俺もやるか。ほーらよ!!」

ポップコーンを2・3粒地面に投げる。ハトが首を前後に振りながらつついてきた。

「ねえ、岩崎くん、これ何バトなの？」

「ドバトだよ。カワラバトともいうけど。林なんかにいるのはキジバト。俗にいうヤマバト。」

「岩崎くんは生き物のことすごく詳しいもんね。ねえ、ポップコーン上に投げたら飛びながらパクツって食べるかな!？」

「そんなことするか!!・・・やってみれば？」

僕がそういうと香澄はポップコーンを5・6粒、上にむかって放り投げた。

1羽がピューンと飛んできた。そして空中でパクツ!!

「すごいすごい!!」

そんなアホな!？ハトは骨格からしてそんなこと絶対に出来ないはず・・・。

結局ポップコーンは一瞬のうちに無くなってしまった。

＊

「もうそろそろ帰ろうか。香澄家帰ってやらなければいけないことがあるし。」

えっ?と思ったが時計を見たらもうじき3時・・・今から家に向かってちよいどいい時間かもしれない。

「・・・そうだな。」

ホントはもっと香澄と一緒にいたい。このまま二人でずっと・・・けど時間が経てば経つほどずっと一緒にいたくなってしまふ。キレ

のいいこの辺で。

「岩崎くん何で来たの？」

「俺？地下鉄。平岸駅に自転車停めてある。」

「香澄、中央バスで来たんだ。平岸駅だちょっと遠いからなあ・
・じゃあここでサヨナラしようか！また明日ね！」

「瀬川。」

「んっ？」

「今日はホントありがとう。すっげえ楽しかったし嬉しかった！」

「また行こうね！バイバイ！！」

僕に背中を向け香澄が去っていく・・・僕はしばらく呆然とその場に突っ立っていた。香澄と映画を見に行って、香澄とハンバーガー食って、香澄とハトに餌やって・・・今日一日どれだけ香澄と同じ時間を過ごしただろう。ふと空を見上げた。モコモコした小さい雲が何個も並んでる・・・ハトにばらまいたポップコーンみたいに。またこんな雲の下で香澄と同じ時間を過ごせたらいいなあ。中学になっても、高校になっても、大学になっても、大人になっても、ずっとずっと・・・。

「お前こんなとこで何してるの？」

えっ！？後ろを振り向いた。信也だった。両親と一緒にいる。

「えーまあ、おかあさんがデパート行って俺だけ暇つぶしに外に・
・・」

「ふうん、そんな感じには見えないけど。」

信也の冷たい一言。しかも表情まで冷たい。こんな態度の信也は初めてだ。

「じゃあな・・・」

信也が両親と一緒に去っていった。何なんだあいつは？

第11話「友達がいなくなった日」

次の日、遅刻寸前で登校した。いつも一緒に学校に行くはずの信也が向かえに来なかった。家でずっと信也を待っていたがいつまで経っても来ない。ギリギリまで待っても来なかったので猛ダッシュで学校まで行った。信也はすでに机に座っていた。流石に僕も頭に来た。

「お前なんで今日来なかったんだよっ!!」

「・・・別に。お前と行きたい気分じゃなかったからさあ。明日から俺ひとりで行くわ。」

「何だよ!? 俺何かしたか?」

「あー、それだったら昨日のこと俺みんなに言うよ。どーなるだろうな・・・」

「・・・見られてた。信也は知っててあえてあの場で言わなかったんだ。それにしても何で信也が機嫌悪くなるんだ? 何で?」

＊

「さあ、今から久々に席替えをします。」

滝川先生が言い出した。教室中どよめきが起ったが・・・このクラスになって3回目の席替えだ。そんなに早いサイクルではない。出来れば信也の近くは遠慮したい。今朝あんなことあったばかりだし・・・。

僕は窓側の席の前から3番目だった。まあ無難な席か・・・。

「川端昌明、窓側の前から4番目」

何っ! 僕の大嫌いな昌明が僕のすぐ後ろ・・・弱いものイジメが好きで、先生に見えないように陰湿なことをやってくる。5年になって一緒のクラスになってからは遠回しに避けてきた。でもここですぐ真後ろとは・・・。

香澄は真ん中の列の一番後ろの席だった。僕からはちょっと遠い・
・また隣になるなんてそんなムシのいいこと続かないね。

席替えの後、先日やった算数のテストが帰ってきた。信也は92点、僕の嫌いな昌明も95点・・このあたりは頭がいい。僕は・・・87点か。まあまあだな。香澄は56点、本間は48点・・ホントに勉強してるのか!? 伸明は・・・72点。

いつも学校終わってからは塾や稽古事でほとんど遊ぶ暇の無い伸明。休み時間もいつも塾の予習をしている。ただ、その割にはいつも成績が良くない。正直僕と信也以外まともに話す友達もいない。伸明、普段どんな気持ちなんだ？

＊

結局その日は後ろの昌明とはひとことも話すことなく、信也とも朝の一件以降ひとことも話さなかった。孤独な一日だった。考えてみれば信也以外ある程度心を開いて話せる友達が僕にはいない・・・あいつは失礼なところもあるけど、何かかん言って多少内気な僕には合っていたのかもしれない。何であんな態度を取ってきたのだろう。香澄と二人で歩いていたらか？ 信也も高橋と同じようにしたかったのか？ 僕にヤキモチを焼いているのか？

家に帰り、自分の部屋にこもる。宿題でもしようとして算数の教科書とノートを開く。駄目だ、全く手につかない。香澄・・・今日は話全然しなかったけど、どんな気持ちだった？ 楽しかった？ 嬉しかった？ 昨日の映画の話もちよっとしたかったなあ・・・学校の中では出来ないなあ。

気が付けば算数のノートに香澄、香澄、と何個も書いていた。書くだけで切ない。出来ることなら今すぐにでも会いたいのになあ。

＊

次の日事件は起こった。それは2時間目の後の休憩の時だった。この日は一日中雨でみんな教室の中にいた。伸明がいつものように机で塾の予習をしていた。

「伸明、お前なにやってるのお？ べんきょう？？」

声変わりしている低い声が伸明に語りかけてきた。昌明だった。

「あっ、ごめ〜ん！！」

そういいながら昌明は伸明の頭の上にエルボーをくらわす。伸明が前のめりになり、持っていたえんぴつが反動でノートにみにくく蛇行した筆跡をつけた。

「でもお前勉強しても頭良くならないから一緒だよな！」

伸明は何も言い返さない。

「あっ、今度は足が！！」

昌明が机の上の教科書、ノート、筆記用具を一気に足ばらいした。全部机の下に落ちた。

伸明が無言で拾っていく。

もう伸明がこれ以上やられているのを見てられない。僕は昌明の前に行って止めようとした。

「やめろよ・・・」

「何お前？」

「やめろっていつてんだよ！弱いものイジメしてんじゃねえよ！！」
3時間目開始のチャイムがなった。昌明はものすごい目で僕をにらみながら席についた。僕は伸明の筆記用具を拾うのを手伝っていた。そして伸明に渡そうとした時だった。伸明が僕の耳元でつぶやく。

「弱いものイジメってなんだよ？」

「えっ？」

「弱いものってなんだよ？ お前俺をバカにしてるのか？ ふざけるな！！」

返す言葉がなかった。僕が昌明に何気なく言った一言が伸明を思いっきり傷付けていた。

＊

その日の昼休み、僕がトイレに行って教室に戻ってくると、僕の席に誰か座っている・・・昌明だった。仲間数人とつるんで僕のノートに落書きを書いている。こっ、この野郎っ！

「・・・てめえ、いかげんにしろよ!!」

「えっ？これお前のノートなの？ごめん、俺の落書き帳とカン違いしてた・・・んっ？何か書いてあるぞ！香澄、香澄って・・・お前瀬川のこと好きなの？」

しまった・・・昨日何気にノートに書いていた香澄の名前。こんなヤツに見られてしまうとは。

「かえせよ・・・」

「えっ？」

「かえ・・・ぐはっ・・・」

言ってる途中に昌明に握りこぶしがものすごい勢いでどてっ腹に食い込んできた。前かがみに倒れこんでしまった。

「おい、みんな！岩崎って瀬川のこと好きなんだぜ!!このノート見てみろよ!!」

昌明が僕のノートを左手に高々と持ち、クラス全員に聞こえるくらいのでかい声で言い出した。

「ふざけんなよ、こ・・・」

言った瞬間、昌明の握りこぶしが僕の顔面に入る。大量の鼻血が噴き出した。

鼻を右手で押さえ何とか立ち上がった。その瞬間、今度は右のハイキックが僕の後頭部に当たる。目玉が飛び出しそうなくらいの衝撃。耳がキーンとする。こんなすごい蹴りくらったの生まれて初めてだ・・・。だっ、駄目だこいつ強すぎる。うつ伏せに大の字になってブツ倒れた。もう立ち上がれなかった。

「何こいつ？すっげえ弱いでやんの。」

昌明が僕に捨てゼリフを吐いて教室を出て行こうとしたその時だっ

た。

「おい、ちょっと待てよ!!」

低いトーンの声が昌明を呼び止める・・・香澄だった。腕組みしながらうつむき加減で自分の席に座っている。

「岩崎がお前に何かしたか？お前調子に乗ってんじゃねえぞ!」

「おっ？岩崎婦人のおでましか？いやあ熱いねえ?」

昌明が香澄をからかう。

「だから何だよ?」

「はあ?」

「だから何だって言ってんだよっ!!」

香澄が自分の机を両手で叩いて立ち上がった。そしてそのまま昌明の前に立ちふさがった。

「誰のこと好きだっていいだろ!誰のこと好きだって。それでお前に迷惑かけたか?そんなことお前にカンケーねえだろ!!」

香澄の叫び声が教室中に響き渡る。香澄・・・僕のためにここまで身を張ってくれる女の子。信也にも仲明にも嫌われたこんな僕に。それに引きかえ僕は・・・

「瀬川何お前?俺にケンカ売ってるの?」

昌明が言い終えた瞬間、右のこぶしが香澄の顔に・・・かつ、かすみい!危ないっ!!

当ると思った瞬間、咄嗟に香澄がかわした、それと同時に香澄の握りこぶしがカウンター気味に昌明の顔面をとらえた!昌明の鼻から血が流れ出す。

「てっ、てめえ、女だからって調子に乗ってんじゃねえぞ!!」

昌明が香澄の左手首をつかんだ。そしてそのまま背中の上にねじ上げる。

「痛いっ!」

「てめえ香澄に何しやがるんでえ!!」

その言葉と同時に昌明の顔面に蹴りが飛んできた。本間久美子だった。昌明の手が香澄から離れる。そして本間をにらみつける・・・。

「ほんまっ！てめえなめてんのかっ！！」

「ぐるあああああああああああああつ！！！！」
本間が両手で机を頭の上まで持ち上げた。そして昌明めがけてぶん投げた。

当たるか！！？しかし昌明が両腕で机を払いのけた・・・。

それ以降昌明はいたって冷静だった。本間に手を出そうともしない。逆に本間は興奮しまくり。周りに取り押さえられてようやく席についた。香澄は暗い表情のまま無言で自分の席に着く。僕は・・・ようやく起き上がり床や顔についた血をティッシュで全部拭き取った。昼休み終了のベルが校内に響いた・・・昌明が全く手を出さなかったのは、5時間目が始まって先生に見つからないようにするためだったのか？

滝川先生が教室に入ってきた。

「ん？いつ、岩崎！どうしたんだその顔は？」

「先生っ！」

昌明が手を上げた。

「岩崎は昼休みイスにつまづいて机に鼻をぶつけたんです。」

「そうなのか？岩崎。」

本当は違う・・・けどここで違うといったら、また昌明の復讐が待っている。今度はこんなじゃすまない。トイレかどっかに呼び出されてボコボコにされるかもしれない。

「・・・はい。そうです。」

「保健室に行ってみてもらってきなさい。」

「・・・いつ、いや、いいです。もう血も止まったし。」

「先生っ、僕が岩崎と一緒に付いてきます。流石にものすごい量の鼻血が出てたんで心配です。」

昌明だった。こいつ・・・。

「おっ、川端悪いな！一緒に付いて行ってあげてくれ！」

僕は昌明に連れられてそのまま教室を出た。教室を出て4・5歩あるいた瞬間、昌明の蹴りが僕の背中に飛んできた。こけるまではい

かないがよろめいた。そして昌明が耳元でつぶやいた・・・。

「お前、こんなもんじゃすまねえからな。俺の前の席になったからには覚悟しとけよ。」

第12話「生き地獄」

翌日の朝・・・今日からもう信也は向かえに來ない。

「あれ？今日は信也くんは來ないの？」

「・・・うん。今日からは1人で行くわ。」

たったひとりだけの寂しい登校。考えてみれば小学校1年の時からずっと信也と一緒に登校していた。これからはずっと1人なのかな・・・。

学校に着いた・・・えっ？・・・無い！無い！上靴が無い！！・・・しょうがない、来客用のスリッパを履いて教室まで行くか・・・。

＊

教室に入った。誰も僕に何か声をかけない。

滝川先生が教室に入ってきた。即先生の前に駆け寄る。

「先生、僕の上靴が今朝着たら無かったんですが・・・」

「えっ・・・そうかわかった。」

僕が席につき、朝の挨拶が終わった後先生が言い出した。

「岩崎の上靴が無いみたいだが、誰か心当たりのあるものはいるか？」

「・・・」

みんなものの見事に無言だった。少しは、エーッと驚きの声があるっても良さそうなのに誰も何も言わない。

「そうだ、先生！クラス全員で探したらどうですか？困ってる時はみんなで助け合うのがいいかなあとと思って・・・」

昌明だった。一番あやしいお前が何でそんなことを言う・・・。

「川端、いいこと言うじゃないか！じゃあ30分くらいみんな一緒に探そう。」

滝川先生はすっかり昌明のペースにはめられている。クラスの連中

はいっせいに玄関に向かっていった。

玄関に着くと僕の上靴探しが全員でいっせいに始まった。あるものは靴箱周辺、またあるものは校門のあたり。各自がそれぞれ考えられそうなところに散っていった。

「先生！ありました！！」

開始してからわずか3・4分で昌明が上靴を見つけた・・・。

「どこにあった！？」

先生が言うと、昌明は答えた。

「裏の焼却炉の中にありました。でも僕が見つけた時にはもう焦げていて・・・」

昌明の手に持つてる上靴を見た。左足のはつま先から半分が完全に焦げている。右足のは紐が燃えてしまつて半分無い・・・。

「これはひどいな・・・岩崎、辛いだろうが、しばらくスリッパでいなさい。」

「・・・はい。」

「あつ、そうだ。靴を見つけてくれた川端にお礼をいいなさい。」
「えっ？」

「靴を見つけてくれたんだ、礼くらい言うのは当たり前だろ！？」
僕は昌明の前に行った。そして一言言つた。

「・・・ありがとう。」

「いやあ先生、そんな礼だなんて、クラスの一員として当然のことをしたまでです。」

昌明は僕を見ようとせず、先生に向かってそう言つた。

悔しくて涙が出てきた・・・自分の靴を燃やされた。確かにそれもある。ただそれ以上にみんなが昌明にだまされている。クラスの人間だけでなく先生までも。もう信也や伸明はしょうがない。本間！お前昨日昌明とケンカしてたよな！？お前は僕のことどう思つてるんだ？そして香澄・・・香澄はどうなの？もし他のみんなと同じ行動取るなら・・・悲しいよ。

教室に戻り自分の席に着く。後ろには昌明がいる・・・思わず言っ

た。

「お前だろ！お前が隠したんだろ！！」

「俺？どこに証拠があるんだよ？どこに証拠が！！」

そう言い終えると昌明はイスに座りながら前の僕の腰に蹴りを2・3発入れた。

「何の音だ？」

先生が僕と昌明の方を向いて言った。

「あつ、すいません。机に足が当たったもんで。」

昌明が咄嗟に言う。

「そうか、あまり大きい音たてるなよ。」

先生はその一言だけであっさり終わらせてしまった。

その後も授業中に4・5発蹴りが入った。何をしたというわけじゃない。昌明が面白がって蹴ってくるのだ。いつ蹴りが入ってくるのかという恐怖で僕は授業どころじゃなかった。

＊

昼休みになった。いつもは外に出て行く昌明だが、今日は違った。

「よお、今日からプロレスごっこしようぜ。」

僕の横に来て肩をたたいて言った。昌明の取り巻きの連中も2人いる。

「信也、お前もやんねえか？」

昌明が信也に声をかける・・・何で信也に？

「えっ？俺も！？よっしゃやるぜ！！」

何考えてるんだ信也・・・僕お前に何かやったか？

昌明に連れられるようなかたちで僕は体育館横の体育器具室まで行った。体育器具室には高飛び用のマットがあった。器具室に着いた瞬間・・・

（バキッ！！）

後頭部にいきなり蹴りを食らった・・・目玉が吹っ飛びそうになる、

耳がキーンとする。前のめりにマットに倒れこんだ。

「やっぱ延髄切りはすげえな！猪木じゃなくても効果あるぜ！よおし次はサソリ固めだ！」

昌明はうつ伏せに倒れてる僕を無理矢理仰向けにして足を持って交差する、そしてその状態のまま反転して、思いっきり腰を僕の背中に落とした。

「痛いっ！やっやめてっ！！」

もう悲痛な顔で痛みにこらえて泣くしかなかった。しかしそれだけではすまない。

「よくしみんなストンピングだ！」

信也を入れた残りの3人が僕の頭に容赦なく蹴りを入れてくる。頼む、もうやめてくれ。

サソリ固めが解かれた。ホッとしたのもつかの間。

「おーし今度はバックドロップ決めるからよ、岩崎てめえ立てよ！」

昌明の蹴りが横っ腹に入る。

「オラオラ立てよ！」

信也が僕の脇をかかえ無理矢理立たす。

（キーン、コーン、カーン、コーン）

昼休み終了のチャイムがなった。

「チッ、バックドロップ決める前に終わってしまったか・・・まあ明日があるからいいか。」

あっ、明日もあるのか！？

「まっ、昌明！」

「何だよ？」

「かつ、カンベンしてくれ！俺が悪かった！！」

もうこんなの耐えられない・・・僕は昌明に土下座した。

「やだ。悪かったって？お前なんかやったっけ？俺面白いからやってるだけ。お前のその情けない顔がな。」

もう毎日が生き地獄だ・・・。

＊

学校帰り、またもや後ろから蹴りを入れられた。信也だった。

「お前、瀬川と仲いいからって調子に乗ってんじゃねえぞ。こっちなんで高橋と同じ班にも隣の席にもなったこと無いのに何でお前だけ。」

何だその考えは？俺だって自分で選んで香澄と隣の席や林間学校で同じ班になったわけじゃない・・・ひねくれてるのにもほどがある。信也がからかってもう一発蹴りを入れようとしてきた。両手でキャッチしてそのまま転ばした。そして馬乗りになって信也の顔面を何発も何発もブン殴った・・・。

「ふざけんな！ふざけんじゃねえぞこら！！」

そう叫びながら僕は顔をグシャグシャにヨダレを垂らしながら泣いていた。何で僕が、何で僕がこんな目に・・・。

「おっ、お前こんなことしていいのか？昌明に言っただコボコにしておるぞ・・・」

信也が殴られながら言った。思わず手を止め、信也から離れた。

信也は何も言わず自分の家の方に去っていった。

第13話「絶望」

翌日もそのまた翌日も地獄の日々は延々と続いた。授業中、背中に蹴りが何発も飛んできた。いつ蹴りが飛んでくるか・・・いつも怯えていた。

給食、昌明がわざとらしく僕の給食の上で自分の頭をおもいっきりかいてフケや髪の毛を入れた。一口も食えなかった。

教科書、国語も算数も理科も社会も落書きだらけになった。その都度消すが、翌日にはまた落書きだらけ・・・もう消すのをあきらめた。

昼休み、いつもプロレスの相手。容赦なく危険な技をかけてくる。身体のおうちこっちが痛い。首もひねっておかしい。逃げようとすると昌明の取り巻きが僕を無理矢理押さえ、嫌でも技をかけさせられる。

9月も半ばのある日のことだった。トイレから戻ってくると、昌明が僕の机の中に手を入れていた。そして筆入れを持ち上げた。

「おい、和生、窓から捨てるぞ！」

昌明は僕の筆入れを窓から放り投げた。なっ、何てことを。ここ3階だぞ！？僕は教室を飛び出し、外に向かって走った・・・

玄関で靴を履き替え、窓の真下の筆入れを探す。窓から昌明や取り巻きの連中がニヤニヤした顔で見ている。信也までいる。昌明が両手に何か抱えている・・・僕の教科書とノートだ。

「ごめーん！和生！これも落ちちゃったあー！！」

そう言うと昌明は僕の教科書とノート全科目分、窓からおもいっきり放り投げた・・・自分の教科書やノートが頭めがけて落ちてくる。ひとつひとつ拾い集めた。窓からみんなニヤニヤした顔で僕を見ている。自分が惨めでたまらない。涙が目からおもいきりあふれてきた・・・教科書、ノート、筆入れを抱え教室に戻った。

「まさあきいっつ！おまええええええええっ！」

教室のドアを開けて叫んだが、昌明はにやけ面で僕のカバンを窓から出していた。そしてゆっくり手を離れた・・・カバンが窓の下に落ちていった。僕は教科書、ノート、筆入れを抱えながら、再度、窓の下までカバンを取りに行った・・・もう生きてるのが嫌で嫌でたまらない。

＊

放課後、教科書とノートをカバンの中に入れ帰り支度・・・もうこんな所には1秒たりともいたくない。

「えっ！お前んちファミコンあるのお？今度やらせろよ！！」

「ああ、いいぞ！！何なら今日来るか？」

昌明と信也が僕の後ろで仲良さそうに話している。こいつら前なんてたいた仲良くなかったのに・・・僕という共通のいじめ相手が出来たから仲良くなったのか？

帰り道。ひとりぼっち。早足で家に向かう。多分学校帰りに昌明が信也の家に遊びに行く。信也は僕と帰る方向が一緒・・・見つければまたあいつらにやられる。

家に着いた。おかあさんが玄関に出てくる。

「・・・和生。最近学校で何があったの？毎日アザだらけじゃない！？」

「何でもないよ。」

「何でもないはず無いでしょ！！」

「ホントに何でもないったら！！」

そのまま自分の部屋に駆け込みドアを閉めた。枕に顔をうずめる。もう誰にも会いたくない。何でこんなことになってしまったんだ？僕がいったい何したっていうんだ？信也！申明！お前たちにそんなひどいことしたか？香澄ともあれ以降一回も話してない・・・元々校内ではあまり話さなかったけど。香澄・・・寂しいよ、辛いよ。

「和生、入っていい？」

おかあさんだった。いいとも何とも言っていないがドアを開けた。

「和生、信也くんのおかあさんに電話して聞いたわよ。階段でころんだんだった？ そうならそうって何で言わないの・・・」

「でてけーっ!!」

おかあさんに枕をおもいっきり投げつけた。おかあさんは何も言わずドアを閉めて出て行った。何で信也の家なんか電話したんだ!! しかも信也は大嘘をついている。いったいどこまで僕を潰せば気がすむんだ・・・。

＊

翌朝、教室に入った。昌明の席で信也が昌明に耳打ちしている。

「おっ、お前なんでそんなすげえネタ今まで言わなかったんだよ!？」

「どうだ結構凄いだろ!？」

何の話だ? 何か気になる・・・。

＊

その日の帰りの挨拶の時だった。滝川先生の連絡事項があった。

「最近子供同士でゲームセンターなどに行ってる人が多いという話を聞きました。そういうところへの子供だけの出入りは禁止です。どうしてもやりたい時はおとうさん、おかあさんと一緒に行くようにすること・・・」

「先生!」

信也がいきなり手をあげた・・・。

「何だ松下?」

「この前、岩崎と瀬川が2人きりで大通公園でハトに餌やってました。ゲームセンターじゃないけど、小学生2人だけで街中に行くのはどうかと・・・」

・・・目の前が真っ暗になった。信也お前何てこと言うんだ。しかも僕だけじゃなく香澄まで。教室中がざわめいている。

「本当なのか？岩崎？瀬川？」

滝川先生が重い声でたずねてくる。僕も香澄も黙っていた。その時、昌明が後ろから小声でつぶやいてきた・・・。

「お前、何やってたかぜくんぶ知ってるんだぞ。正直に言えよ。でなければ殺すぞ。」

・・・もうこれ以上地獄の思いはしたくない・・・

「黙っててもわからないだろ！？どうなんだ？」

「・・・はい。瀬川と2人で行きました。」

もう正直に答えるしかない。でなければ殺される・・・

「何で大通公園になんか？ハトに餌やりに行っただけか？」

「・・・いいえ。その前に2人で映画に行きました。」

「見に行くお金は？両親が出してくれたの？」

「いや。瀬川からチケットもらいました。」

周りからどよめきが起こる。信也まで啞然とした顔をしている・・・しまった！このことは知らなかったのか！ふと香澄の方を見た・・・強ばった顔でガタガタ震えている。ぼっ、僕は何てこと言ってしまったんだ・・・。

「それだけか？」

「はっはい。それだけです・・・」

「後で家に本当かどうか電話をさせてもらうから。今日はここまで。」

みんな先生に礼をして、さよならの挨拶をした。香澄がそのまま教室を走って飛び出す・・・僕も急いで教室を出ようとした。が、誰かが首根っこを引っ張る。昌明だった。

「お前、瀬川と映画なんて行ってたのお？しかも小学生同士で・・・フツーそこまでするか？」

「てっきりハトに餌やってるだけだと思ったのにな。自分で言うかフツー！？」

信也だった。こいつが、こいつが先生に言ったがために・・・。

「何お前その顔？俺に殴りかかろうっての？昌明、こいつボコボコにしたろうか？」

「ボコボコなんて人聞きの悪い言い方すんなよ信也？プロレスごっこしやうぜ。」

昌明に手首を強く握られ体育館横の器具室に連れてかれる・・・抵抗なんて出来ない。した時には倍返しだ。恐い。自分で凄く情けない顔をしてるのがわかる。その横で信也が笑っている。

「何こいつ、もう泣きそうな顔してるぞ。おもしれえ。」

準備室のマットの上に無理矢理放り投げられた。もうそれだけで恐い・・・。

「ようし、今日は無制限3本勝負な！！カーン！！」

昌明が言った瞬間、ものすごい蹴りが僕の左頬に飛んできた。間髪いれずどてっ腹に握りこぶしが一発・・・駄目だ、もう意識が遠のく・・・。

＊

気が付いたら器具室のマットの上でうつ伏せで倒れていた。周りには誰もいない。窓を見た。もう外は真っ暗だ。身体中が痛い。僕は気を失ってたのか・・・。

急いで玄関まで行く。良かった、鍵はまだ開いている。靴を履き替え、校門を出て時計を見た。7時を回っていた・・・急いで家に帰らなくては。

家の前に着いた。チャイムを押す。おかあさんが出てきた・・・。

「和生、あんたいったいどこ行ってたの？瀬川とかってコと遊びにいったの？」

怒った声でいきなり僕に言ってきた。しかも香澄が悪者にされている・・・。

その後、僕は両親にこっぴどく叱られた。

「そんなに映画が見たかったんなら連れていったのに何でいわないんだ？」

「何だよその家からチケットをもらうようなことするんだ？」

「瀬川ってコは一体何者だ！！」

僕のやったことが、僕が人生の中で凄く楽しかった、凄く嬉しかった日が全て否定されている。香澄までもが。

「もういい！自分の部屋で頭を冷やせ！！」

「・・・はい。」

自分の部屋に戻り、ドアを閉めた瞬間、涙が次から次へとあふれてきた・・・。

「ちがうのに・・・ちがうのに・・・」

枕を抱えて泣きじゃくった・・・もうどうしたら、どうしたらいいのかわからない・・・。

第14話「空しいだけの日々」

あの日から2日間、香澄は学校に来なかった……。僕のせいだ、僕があんなこと言ったばかりに……。

あの日以降、昌明や信也からの殴る蹴るの攻撃は無くなった。理由ははっきりとはわからない。ただあの翌日、僕の席の後ろで昌明と信也がしていた会話……

「ちゃんと学校きてるぞ……」

「死んだんじゃないかと思ったからなあ……あせって損した。」
「どうやらあの一撃で意識を失ってたらしい。それを昌明達が死んだ
と思いこんで逃げたみたいだった。」

ただ、もう僕には誰も話しかけて来ない。みんなひたすら無視を続けている。結局僕には友達なんて存在はいなかったのだ。自分が悪かったのか、周りが悪かったのかはわからない。でも結果として一人ぼっちになってしまった……。

＊

香澄が登校してきたのは、あれから3日経ったことだった。明らかに雰囲気が違う。表情が全く無い。香澄も家で相当怒られたのだろうか？友達からも仲間はずれになってるのだろうか？全ては僕の言ったことのせいだ……。もう話すことなんて出来ないね。ごめん、香澄。本当にごめん……。

すまないと思いながらも香澄に対してもうひとつの恐怖心が沸いてきた。香澄は僕に対して絶対に怒ってる。ひよっとしたら、周りにあの林間学校のテントでの出来事をばらすんじゃないか？そう思うといえどもたってもいられなくなってきた。僕は映画に行ったことをみんなに話してしまった……。今度は香澄が僕に……。

＊

昼休みのことだった。

「香澄！ドッジボールに行こうぜ！！」

本間だった。香澄は無表情で下を向いたままだった。

「どうしたんだよ？いつまでも暗い顔してないでパッと行こうぜ！！」

「・・・行かない。」

「何言ってるんだよ！？遠慮なんてしないでよお！！」

「行かねえって言ってんだよ！そんなに行きたきやお前1人で行けよバカッ！！」

香澄が本間に怒鳴りつけた。本間は啞然としてる。

「なあ香澄どうしたんだよ？何かあるんなら言ってみろよ？」

「何でもねえんだコラッ！お前上からモノ言ってるじゃねえよ？いかげんにしろよ！」

「・・・かつ、勝手にしろっ！！」

香澄に言われたのが相当ショックだったのか、本間は教室から飛び出して行ってしまった。香澄、どうしたんだ？本間は別にお前に何もしてないだろ？それとも全部僕のせいなのか？僕があんなことを言ってしまったばかりに、香澄と本間の仲さえも引き裂いてしまったのか・・・。

＊

香澄が本間とケンカしてから1週間が経った。あの一件以降香澄は昼休みにグラウンドに行かなくなった。教室の後ろで騒々しい声で話している。

「それでさーアイツ男の癖に情けなくてさー」

「うわっ、超むかつく！」

相手は2組の竹中雅子。中学に行ってる兄貴が不良で、竹中本人も

一緒に夜遊びに繰り出してゐるらしい。授業の態度も悪くあまりいい噂を聞かない・・・香澄、そんなヤツとつるんでゐるのか。

香澄は変わってしまった。

朝は常に遅刻。それもわざとやってゐるかの如く。滝川先生が注意するも全く反省の色無し。それどころか口ごたえまでする。

昼休みは竹中と一緒に。話のネタは学校から帰ってからの遊びと他人の悪口。しかも汚い口調で大きな声でわめきたてる。今は誰も香澄に近寄ろうとしない。

真ん中の席で伸明が勉強している。塾の予習をしているみたいだった。竹中が消しゴムをちぎって伸明にぶつけている。伸明の髪の中に消しゴムの粒が2個3個入っていく。伸明はジッと我慢している。「わー、おもしれえ！わたしにもやらせろよ！！」

そう言いながら香澄も伸明に消しゴムをちぎってぶつけはじめた。とうとう我慢出来なくなつて伸明は香澄を無言でにらみつけた。

「何お前にらんでるんだよ！何も出来ねえくせにふざけんじゃねえぞコラッ！」

そう言つて香澄は伸明にツカツカと近寄ると、靴底で顔面を蹴り上げた。伸明がよろめく。顔には香澄の靴底の跡がくつきりとついている。伸明は黙つてハンカチで顔を拭きながら、また勉強を始めた。

「もうこんなどこにいてもしゃあないな・・・午後は算数だし、わたし帰るわ。」

竹中が言つた。

「えー、雅子帰るの？わたしも帰るわ・・・次理科だから面白くないし。」

そう言いながら香澄と竹中はカバンを持って教室から出て行つた。お前らまだ小学生だろ！？いったい・・・。

昼休み終了のチャイムが鳴つた。滝川先生が入つて来た。

「あれ？瀨川は？」

「帰りましたよ、カバン持つて。」

信也が先生に言った。何でこいつはこんな時、しゃしゃり出るんだ・。

「まったくしょうがない奴だな・・・何考えてるんだ。」

滝川先生も呆れて何も言えない。今週になってから勝手に帰ったのは3回目・・・1回目の時はみんなで香澄を呼び戻すために外へ探しに出た。それでも見つけることが出来ず、結局先生が香澄のおかあさんに電話した。3回目になったら先生もすぐに動こうとしない。あとでまた香澄の家に電話するくらいだろう。

「瀬川ってあいつ夜も竹中や竹中の兄貴達とどっかに遊びに行ってるらしいぜ。信じられねえな！」

後ろで昌明が隣のヤツとヒソヒソ声で話している・・・誰のせいで香澄はこんなふうになってしまったんだ？誰のせいで？・・・でも結局は僕のせいだ。僕があんなこと言ってしまったのが悪かったんだ・・・僕の知っている香澄はもういない。

＊

「ただいま。」

「あらおかえり。最近早いじゃない？」

「・・・別に。」

友達がひとりもない。何もすることが無いので真っ直ぐ家に帰ってくる。家に帰っても別に遊びに行くところは無い・・・。

自分の部屋のドアを閉めてベットにうつ伏せで寝転んだ。気が抜けている。あまりの周りの変化に身体がついていけない。もう涙も出ない。あるのは空しさだけ・・・。

信也も伸明も僕から離れていった・・・多分もう仲良く話すこともない。信也は僕や伸明に対して常に優越感に浸りたかったのだろう。普段の言動からしてそんなところはあったが、今回僕と香澄が大通公園で遊んでたのが相当気に入らなかったみたいだ。伸明は・・・逆かな？僕の方が彼を常に下に見ていたのかもしれない。どっちにせ

よ薄っぺらな友情だったんだな……。

香澄は……僕たちもう仲良く話すこと出来ないね。活発で、ちょっと気の強めな女の子。でも僕の前では凄く女の子っぽくて……。香澄とアパートのハシゴを登ったこと、香澄と雑貨屋の商品を見たこと、香澄と映画を見に行ったこと、そしてテントの中のこと……。

おちんちんが硬くなっている。何なんだろう。香澄となんてやれること無いのに、そんな日なんて絶対に来ないのに、絶対に、絶対に来ないのに……。

パンツを降ろした。右手でおちんちんに触れる。くすぐったい。香澄の中ってあったかいんだろうか？香澄の中に入りたい。ひとつにつなりたい。右手で上下にこする。ものすごくくすぐったい。入りたい、入りたい、香澄の中に入りたい。手の動きがどんどん速くなる。もう我慢出来ない。かすみい、かすみい……。

頭の中が真っ白になった。おちんちんが脈を打っている。天井が見えた。外からは遠くを走る車の音……僕の知っている香澄はもういない。ただただ空しかった。

第15話「真相」

「瀬川、ちょっと職員室まで来なさい。」

香澄が滝川先生に呼び出される。香澄は無言で席を立ち先生について出て行った。

「あいつ、5丁目の文房具屋で万引きしたらしいぜ。」

「えーっ！ホントかよっ！！」

クラスの連中がみんなで騒ぎたてる・・・もうどうでもよかった。今まで香澄と共に過ごしてきた時間・・・あれは夢だったんだ。クラスの仲間に散々いじめられ、今となっては誰も口を聞いてくれない・・・これが本当の僕の姿だったんだ。そんな僕に彼女なんて夢のまた夢。好きになってくれる女の子なんているはずが無い。いい夢見過ぎていただけなんだ。香澄も変わってしまった。あの頃と同じ世界はもうどこにもない。もう遠い昔の話なんだ・・・。

＊

「瀬川ってあいつろくでもねえ奴だな！小学生同士で映画館なんて行くわ、万引きはするわ！！」

「ちょっとやりすぎだよな！わたしもよくわかんない。」

昼休み、信也と高橋が香澄のことを話している。信也、お前は強いよ。結局この世の中お前のように、正しくても間違っただけでもない言いたいこと言ったもん勝ちなんだな。よくわかったよ。僕は陥れられた・・・けど陥れられる方が悪いんだね。誰も口を聞いてくれない。生きてる資格ないね。

窓の向こうでクラスの連中がみんなドッジボールをしている。香澄の姿は無い。香澄は隣の教室で竹中とつるんでいる。もうあの明るくて活発な香澄はいない・・・。

家に帰る。今日も結局学校で誰とも話さず。学校から家を往復するだけの毎日。

帰ったら少々の勉強して、晩ごはん食べて、マンガ読んで、テレビ見るだけの日々・・・あとは香澄を思い出してパンツの中に手を入れていた。もうあの優しかった香澄はどこにもいない。けど思い出の中でだったらいくらでも会えるよね・・・気が付けは一日3回も4回もやっていた。あの頃の香澄をひたすら思い出しながら・・・

＊

10月も半ばのある日のことだった。昼休みが終わった直後、ひとりの女が声をかけてきた。本間だった。

「岩崎、話がある。授業終わったら体育館の器具室に来いよ。」

「・・・ああ。」

クラスの連中に話しかけられたのなんて何日振りだろうか・・・しかしいまさら何の話だ。本間と話することなんて・・・何もない。

＊

放課後、体育館横の器具室にいった。もうすでに本間は来ていた。嘘臭く気だるい感じでドリブルなんてしてやがる。そして言い出した。

「お前、香澄のことどう思ってたんのよ？」

「・・・はあ？」

本間はドリブルを止めた。バスケットボールが何個も入っているカゴの中にボールを放りこむ。そしてまた言い出した。

「香澄のことどう思ってたんのよ？」

「・・・別に。何とも思ってたねえよ。」

言った瞬間、本間の握りこぶしが右の頬に飛んできた。そのままよろけて倒れてしまった。

「ふざけんじゃねえぞコラッ!! お前なあ、香澄が今どれだけ苦しんでるのか知ってるのか?」

本間に胸ぐらをつかまれて起こされた。僕は・・・別に何も言うことはない。

「香澄はなあ、香澄はなあ、お前のことずっと好きだったんだよ!!」

えっ!?

「それをお前はあ!!」

左の頬にもう一発握りこぶしが飛んできた。頭がフラフラする・・・香澄が僕のこと好きだったって? えっ?

「香澄はなあ、毎日のように俺にお前の話してきたよ。6月くらいからかな・・・何で好きになったかは知らねえ。でもお前のこと話すときの香澄はすごい幸せそうだった。」

「・・・」

「お前らが2人で映画見に行った時だってな、あいつ俺を誘ってわざわざ下見にまで行ってたんだぞ!! 待ち合わせするんだったらどこがいいかなとか、メシ食うんだったら何がいいかなとか、お前のこといきなり誘って迷惑じゃないかなとか、嫌われたらどうしようとかない!! 下見しながらもあいつすっげえ嬉しそうだった。お前と2人で会えるってな!!」

「・・・瀬川が知り合いからチケットもらったから、たまたま俺に声かけただけかと。」

「アホかお前は!! そんなチケットただくれる知り合いなんているかあ!?! 香澄はな、お前と2人で映画行くためにわざわざ自腹切ってチケット用意したんだよ!! お前が南極物語行きたいっていうの聞いてたからなあ!!」

呆然とするしかなかった・・・香澄が僕のことを好き? 香澄が? 何で僕気付かなかったんだろう? 何で・・・。

「お前が昌明達にいじめられてる時も香澄はすっげえ苦しんでたよ。何とかしてあげたい、何とかお前を助けてあげたいと。俺に相談してきたよ。でも自分がお前に声かけたら、お前が多分周りからかわれるしいじめられる・・・何もしてあげれないってすっげえ辛そうだった。それをお前は、お前は・・・。」

本間がしゃべりながら目にいっぱい涙をためている・・・こんな本間見たことがなかった。僕の胸ぐらをつかむ手を少しづつゆるくなっ

てきています。「・・・頼む、香澄を、香澄を助けてやってくれ。あいつすっごい苦しんでるから。お前にあんなこと言われて何やっていいかわからんだけだから・・・。」

香澄が僕のこと好き？僕のことを？でも本間ごめん。僕香澄を助けてあげることなんて出来ない。多分香澄が僕のこと好きだって知ってても、僕はあの時映画のこと言ってしまったよ・・・昌明達に殺されるかもしれないから。僕は好きな女の子を守ってあげることなんて出来ないんだ。まして人を好きになる資格すら無いんだ・・・。

しばらく泣いた後、本間は無言で器具室から出て行った・・・。

＊

本間がいなくなった後もしばらくの間、僕は一人でももの思いに耽っていた。香澄が僕のことを好き、香澄が僕のことを好き、香澄が、香澄が・・・声が聞きたい、顔が見たい。またあの優しい目で僕を見つめて欲しい。匂いがかぎたい。抱き合いたい・・・いろんな思いが頭の中をよぎる・・・。

第16話「初雪」

学校を出た。足が自然と香澄の家の方に向かう。香澄に会いたい、今すぐ会いたい……。もう相手にされてないのはわかつている。それどころか殴られて、ぼろっかすに言われるかもしれない。でも会いたい、どうしても顔が見たい。

国道を渡って、そのまま国道沿いに100メートルくらい歩いたところにあるビルの下のアパート。香澄の家。この辺りで待っていれば絶対香澄に会える。会わなきゃ、絶対に会わなきゃ……。

ビルの前まで着いた。そこから細い路地があつて少し入ったところにアパートがある。あれが香澄の家か……。路地の入り口で待っていることにした。ここだったら絶対通る。絶対に香澄に会える……。。

＊

もう1時間くらい経ったのだろうか。香澄はまだ来ない。外が暗くなってきた。もうそろそろ星が1つ2つ見えはじめる頃なのだが、曇っているせいか全く見えない。香澄の家であろうアパートをチラッと見る。2階建ての外にトタンの階段の付いている割と小さなアパート。1階の右端が香澄の家らしいけど、電気がついてない。誰もいないようだ。

冷えてきた……。下はGパン、上は薄手のシャツにスタジャン。秋といえども、夜はさすがにこの格好では厳しい。身体がガタガタ震えている。手が冷えるのでさすりながら待つ。

香澄に会いたい一心でここまで来てしまった。でも会って何を話せばいいんだろう……。会って何を。

街灯がつき始めた。こっちに向かって誰か歩いてくる。ちよっと大きめのダッフルコート、右手には手さげカバンを持っている……。

香澄だ。

＊

香澄がこっちに向かってくる、その距離がどんどん近くなる、足が震える、胸の鼓動が速くなる。10メートル、5メートル、僕の目の前まで来た・・・しかし香澄は目線も合わさずにちよっと不機嫌そうな顔でそのまま通り過ぎていく。

「おいっ!!」

香澄を呼んだ・・・振り向こうともしない。

「瀬川っ!!」

もう一回呼んだ・・・足を止めようとしなない。

香澄のどこまで走った。そしてそのまま香澄の前に立ちふさがった。香澄が足を止める。不機嫌そうな顔で僕をにらんでいる。

何を言っているかわからない。何を言ったらいいか・・・。

「・・・ごめん。」

謝りの言葉しか出てこない。何を謝っているのか、映画のことなのか、それとも今立ちふさがっていることなのか、自分でもわからなかった。

「ジャマだどけよコラッ! うざってえんだよっ!!」

左手で僕の胸を突き飛ばし、香澄はそのまま通り過ぎようとした。

「待てよっ!」

また香澄の前に立ちふさがった。香澄は無言で振り払おうとした。このままでは何も出来ない。何のために香澄に会いに来たかわからない。僕は咄嗟に両手で香澄の両手首をつかんだ。

「ふざけんじゃねえぞっ! 離せよコラッ!!」

「人の話くらい聞けよ! 何で無視するんだよ!!」

ものすごい力だ、このままでは振りほどかれる・・・でも絶対に離さない、絶対に、絶対に。正直話なんてない。何話していいかもわからない。でも会いたいんだ、ずっとそばにいて欲しいんだ・・・。

「香澄、かすみい!!」

「名前なんかで呼ぶんじゃないねえ! 気持ちわりい!!」

相変わらずものすごい力で振りほどこうとする・・・でももう絶対に離さない、ようやく香澄に会えたんだ、今までずっと待ってたんだ。

振りほどこうとしながらも、香澄の力がだんだん弱まっていった。目には涙がいっぱい溜まっている。その涙が溢れ、頬をつたい出した時、香澄は振りほどこうとするのを止めた。振るえながら、口を引きつらせて、僕の顔をにらんでいる・・・そして堰を切ったかのように僕の胸に顔をうずめ思いつき声をあげて泣き出した・・・こんな悲しい泣き声を今まで聞いたことがなかった。変わってしまった自分をもうどうすることも出来ない・・・その辛さが痛いほど伝わってくる。香澄、ごめん。本当にごめん・・・。

＊

20分くらい泣いていたのだろうか・・・香澄はその後もしばらく僕の胸に顔をうずめていた。何も香澄にしてあげられない。けど泣いている香澄に胸を貸すくらいなら・・・。

「・・・雪。」

僕の胸の中で香澄が言った。香澄に夢中で全く気付かなかったけど、小粒の雪が空に舞っている。初雪だ。10月も終わりに近づいてるけど、今年はこんなに早いのか・・・。街灯に照らされて小さいながらも輝きながら地面に降りそそいでいく。この季節はまだ根雪にはならない。積もったとしても1日もたたずに消えてしまう。僕の胸の中の香澄・・・香澄も今日1日だけなのか。明日になったらまた違う世界に行ってしまうのか・・・。

香澄の顔が僕の胸から離れた。気の抜けた顔。思い切り泣いたせいか目が腫れぼったい。髪には雪がちらほらと乗っている。そのまま何も言わず僕に背を向け帰ろうとした。

「香澄っ！」

香澄を呼んだ。香澄は無言で振り返った。

「俺、香澄のこと好きだよ。大好きだよ。」

香澄は気の抜けた顔のまましばらく僕の顔を見てた。そして何も言わず僕に背を向け家の中に入っていた。

しばらく呆然とその場に立ち竦むしかなかった。早すぎる初雪が空に舞い、地面を白く染めようとしていた。

第17話「ブランコの上で」

昨日の晩、降り積もった雪も昼前にはすっかり溶けてしまった。まだ10月の半ば過ぎ・・・根雪になるのにはまだ早い。

昼休み、香澄は隣のクラスの竹中と後ろの席で何だか盛り上がっている。時折奇声を発しながら・・・結局香澄は何も変わっていないかった。昨日僕の胸の中で泣いていた姿。あれは幻だったのだろうか・・・

＊

それから数日経ったある日のことだった。昼休み、伸明が自分の机で塾の予習をやっていた。相変わらず、昼休みだというのに誰とも話さず一人黙々と・・・。そこへ二人の女子がちよっかいを出しに伸明の席まで来た・・・竹中と香澄だった。

「・・・こいつ何でいつも休み時間に一人で勉強してるの？」

竹中が香澄に言った。

「さあ！？勉強が友達なんじゃないの？」

香澄がふくみ笑いを浮かべて竹中に答えた。

竹中は何も言わず伸明からノートを取り上げた。そして中身を見た。「プッ！きたねえ字！しかもこいつ全問間違いだぜっ！！小学1年からやり直した方がいいんじゃないの？」

「小学1年じゃなく幼稚園の間違いじゃない！？」

香澄があおった。さらに竹中は伸明のカバンの中を開けようとした。

「・・・やめろよ。」

伸明がようやく口を開いた。

「何？お前しゃべれたの？ノート全部見せろよ。どうせお前には必要無いから、わたしが落書き帳にするからさあ。」

「・・・やめろ。」

竹中は伸明を無視してカバンに手をかけだした。その時だった。

「うあああああああああああつ!!」

伸明が大声をあげて竹中につかみかかってきた。そして竹中の両胸を両手でわしづかみにした。

「いたーーーーいっ!!!!」

竹中は悲鳴をあげた。そしてそのままうずくまって泣き出した・・・。

しばらくして、誰が呼んできたのか滝川先生と保健の先生がその場に駆けつけた。

滝川先生は伸明を見るなり、

「コラッ!! お前何てことするんだっ!!!!」

と、いきなり怒鳴りつけ、腕を引っ張って職員室まで連れていった。竹中は保健の先生と一緒に保健室に連れて行かれた・・・。

胸さわったくらい何だって言うんだ。しかも服の上からだろ? 僕なんて香澄にもっと凄いことしてるんだから。もっと凄いこと・・・。

＊

その日の帰り道、途中の公園で一人ブランコに座っている男がいた。伸明だった。頭をうなだれている。伸明とももう2ヶ月近く話していない。そのまま放っておいても良かった・・・でも足が自然と伸明の方に行く。また敬遠されるかもしれないのに。僕は無言で伸明の横のブランコに座った。

「からかいにきたのか? それともいじめられっこ同士仲良くなるうって言うのか?」

伸明がこっちを見ずにポツリと言った。

「・・・別に。どうでもいいよそんなこと。俺はただ伸明の横に来たかっただけ。」

「これから家に帰ったらママとパパにものすごく怒られるよ。滝川先生は間違いなく家に連絡してるだろうしな。今日は何だか気が重

くて塾もさぼっちゃったよ。」

そう言いながら伸明は空を見上げた・・・時折うろこ雲が混じる程度の秋らしい澄んだ青空、このまんま僕達の嫌な思いさえも遠くに飛ばしてくれそうなくらいの。毎日こんな空を見ることが出来たら人間素直になれるかもしれない・・・伸明に聞いてみた。

「前から聞きたかったんだけど、伸明は何でそんなに勉強してるの？」

「何でって・・・パパやママに言われているからだよ。勉強しないといい就職が出来ないって。今の世の中は学歴社会なんだ。」

正直そんなこと考えたことなかった。将来やりたい仕事・・・駄目だ。思いつかない。でも将来の夢だったら・・・。

「伸明の将来の夢は？学者？それとも弁護士？」

「俺？・・・パパやママは俺を南高に行かせて東京の大学に行かせて一流企業に就職させたがっているけど・・・ホントはプロレスラーになりたいなあ。」

プッ、プロレスラー！？かなり意外な答えだった。今の勉強ばかりしている伸明のイメージと全くむすびつかない。運動神経だって僕よりやや下なくらいだ。伸明が話を続ける。

「金曜8時にやってるワールドプロレスリング。あれを見るのが一週間の唯一の楽しみなんだ。和生は長州力知ってる？」

「いつ、いや。俺プロレスあんまり見ないからさあ・・・」

「すっげえカッコいいぞ。今、藤波辰巳と抗争を繰り広げてるんだけどね、俺は長州の方が断然いいな！！元々はちょうど去年の今頃から始まったんだ。メキシコ帰りの長州が藤波に宣戦布告して、俺はお前のかませ犬じゃないぞって、当時藤波より格下に思われていた長州は自分をどうしてもアピールしたかったんだ。」

伸明が熱く語っている。何が何だかさッパリわからなかった。でもこんなに熱く語る伸明は初めて見た。伸明・・・すげえいいもの持ってるじゃん！伸明の話はまだまだ続く。何とか話題を替えなくては・・・。

「この前の試合は両者リングアウトだったんだ。藤波め、うまいように逃げやがって。でも俺も長州のようにいつか自分をアピールしたいんだ!!」

「ふうん、金曜8時ね。今度見てみるわ・・・それにしても今日の一件は驚いたなあ。竹中のおっぱいどうだった？」

「言って後悔した。やばい、ただでさえこの件で神経質になってるのに、僕は何を聞いてるんだ・・・」

「・・・うーん、あん時は無我夢中でどこつかnderかわからなかったけど・・・柔らかかったよ。女の子のおっぱい触ったのはさすがに初めてだったから。」

「割と素直に答えてくれた。こんな話も伸明と出来るのかな？思いきって聞いてみようかな・・・」

「ねえ伸明、伸明って好きなコいるの？」

「えっ、俺？」

伸明の顔が赤くなった。やっぱいるんだ。ちょっと安心した。

「・・・誰にも言わないか？」

「言わない。俺友達いないし。言う奴すらいらないよ。」

「・・・高橋。」

ちよつと意外だった。高橋智枝美・・・信也が好きな女。伸明も好きだったのかあ。高橋ってもてるなあ。信也が高橋のことばかり言ってた時期、ひよつとして辛かったのかなあ。

「高橋のどんなところ好きなの？」

「・・・何でだろう。俺にもわからない。和生は瀬川のどんなところ好きなの？」

えっ？何でいきなり香澄の名前を・・・でもあれだけ公になってたら知ってて当たり前か。

「・・・何でかなあ。俺もよくわからないや。」

「和生は今でも好きなの？」

「・・・今でも好きだよ。あんなふうにな変わってしまったって。忘れられないよ。」

＊

伸明とはその後15分くらいとりとめの無い話をして別れた。気持ちがスツとした・・・友達と話したのなんて何日振りだろう。自分の心の内を多少だけど吐くことが出来た。そして伸明の意外な一面も知ることが出来た・・・。

（ピンポン！）

「ただいま。」

「おかえり・・・和生、ちょっと話があるの。」

「何？何かあったの？」

そのままおかあさんに連れられて居間まで行った。そしてテーブル向かい合って座った。

「落ち着いて聞いてね。今度、おとうさんの仕事の都合で11月末に釧路に行くことになったの。和生も転校するよ。」

・・・頭の中が真っ白になった。転校？学校がかわるの？札幌から離れるの？周りの環境も全部かわるの？伸明となんて今日仲直りしたばかりなのに・・・香澄は・・・。

「おとうさんが帰ってきてから詳しい話はしてもらってから。とりあえずごはん食べなさい。」

晩ごはんを食べた・・・味なんてわからなかった。気晴らしにテレビを見る・・・内容が頭の中に入ってきて来ない。転校、転校、転校。

僕はここにはあとわずかしきれないのか・・・。

＊

結局この日はおとうさんの帰りが遅くなるということで、先に寝ることにした。

ベットの中でいろんな思いが頭の中をよぎる。転校、もう札幌にはわずかしきれない、釧路ってどんなところなんだろう・・・でもこ

れで良かったのかもしれない。仲間とは仲直りしたけど・・・誰も
友達のいない教室、いじめられた日々、そして遠い存在になってし
まった香澄・・・。人生やり直すのにはいい機会なのかもしれない・
・。

第18話「友達」

朝、おとうさんに今回の転勤の詳しい話を聞いた。子会社への出向で、釧路には少なくとも2〜3年は居ることになるらしい。

「行ってみたら意外といところかもしれないぞ。」

おとうさんは気楽にそんなこと言っている。とてもじゃないがそうは思えなかった。社会科で習ったが夏場は霧が立ち込める街・・・最高気温も20℃以下。札幌では想像もつかない。どんな人が住んでいる街なんだろう。僕のようなよそ者は受け入れてもらえるんだろうか？

＊

学校に行ったら滝川先生が朝礼で即、僕の転校の話をみんなにしだした。おかあさんが学校に連絡していたらしい。

「今日は残念な話があります。岩崎が今度おとうさんの仕事の関係で釧路に転校することになりました。学校には11月19日までしか来ません。岩崎もみんなも辛いと思いますが、残された期間、仲良くやっていきましょう。」

教室内にどよめきが走る・・・ただそれも一瞬だった。先生の話が終わった途端みんな何ごとも無かったかのように静かになる。誰も僕の転校に関しては、たいして何も思っていない様子だった。

後ろの席の昌明が隣のヤツと小声で僕のことについて話している。

「残念なヤツなんて誰かいるのか？みんな嬉しいだろ！？」

予想していたとはいえショックだった・・・所詮ウチのクラスの連中は僕のことをそんなふうにしかなってないんだ。普段ならまだいいとして、何で転校の話があった直後にそんな陰口言われなければいけないんだ。釧路に行ったら生まれ変わろう。少なくとも今までのことは全て忘れて・・・。

先生が転校の話をみんなに伝えた後も、僕の校内での立場は何ら変わらなかった。誰一人として僕には話しかけて来ない。この前仲直りした申明ですら校内では話しかけて来なかった。周りの目を気にしているのだろう。そんな状況が僕の心の中を今まで以上に孤独にしていた。所詮僕はいてもいなくても同じなんだ……。

＊

引越しに向け、自分の部屋を整理している時だった。棚の上のマンガをパラパラめくっていると写真が出てきた。夏に信也からもらった香澄の写真だった。信也にももらったことが悔しくて悔しくて何度も捨てようとしたが捨て切れなかった写真。笑ってる……陽射しの中ピースしながら満面の笑みで。今のこんな日々が来るのを知らずに……。涙があふれて止まらなかった……。僕の前ではいつも笑顔だった香澄。2人で話す時はいつも優しい顔で僕に微笑んでくれた。お互いずっと一緒にいられることを望んでいたはずなのに、何で、何でこんなことに……。もう一度あの頃に戻りたい。一度でいいからまたあの笑顔が見たい。でも無理だよね、もう絶対に無理だよね……。

（ピンポン！）

チャイムが鳴った。玄関に行ってドアを開けるとそこには信也が立っていた……。

「何の用だ？」

「……今までごめん。」

信也がそう言った瞬間、思いっきりドアを閉めた。何をいまさら、何をいまさら言っているんだ！！お前だけは許さない！お前と昌明だけは絶対に許さない！！おかしい言いがかりで僕を散々いじめ抜いた挙句、香澄の人生さえもぶち壊しやがって！いまさらふざけるな！！

信也がドアを叩きながら何度もチャイムを鳴らす。おかあさんが心

配そうにやってきた。

「和生、信也くん来てくれたんじゃないの？出なくていいの？」

「ほっとけ！あいつだけは絶対に入れるな！顔も見たくない！！」

おかあさんは無言で立ち去った。それからしばらくしてドアを叩く音もチャイムの音もおさまった。

部屋に戻った瞬間、香澄の写真を細かくビリビリに引き裂いて捨てた。涙でかすんで見えない。これは幻、これは幻だったんだ。幻だからうまく見えなくて当たり前だ。まして信也にもらった写真……こんなものもういない。

＊

11月19日……とうとうこの学校に通う最後の日がやってきた。転校が決まってから1ヶ月……結局その間、誰ともまともに話をする事が無かった。伸明と帰り道でちょこちょこ話す程度。誰か転校する時はみんなで「お別れ会」とか企画することが多いけど、そんな話すらもあがってこなかった。所詮僕には友達なんていなかったんだ。5年間いた学校での最後にしては寂しすぎる。自分でも情けなかった。

帰りの挨拶の前に、滝川先生が僕を黒板の前に呼んだ。

「今日で岩崎とお別れです。岩崎、最後の挨拶を……」

「今までありがとう。釧路に行ってもがんばるので、みんなもがんばってください。」

（パチパチパチパチ……）

周りから拍手が一斉にあがった。何の拍手だろうか？挨拶に対する返答？それとも僕がいなくなることに對する喜び？もうどうでもよかった。ここの学校には何の未練も……未練。

先生の帰りの挨拶が終わった。香澄が廊下に出て行く。追わなきゃ、絶対に追わなきゃ！許してくれなんて言わない。でもせめて、せめて最後の挨拶だけはさせてくれ！！

教室を飛び出し、香澄の前に立ちふさがった。香澄は歩くのを止め、無表情で僕の顔を見ている。

「あのお・・・」

僕がそう言った瞬間、香澄の横に誰か来た。竹中だった。

「香澄、早く帰ろう！・・・何こいつ？何で香澄の前に突っ立ってるの？気持ちわるい・・・」

そういうながら竹中は香澄を連れてその場を立ち去った。香澄は無表情のままだった・・・。

駄目だったか・・・。呆然と突っ立ったままの僕の肩を後ろから叩く奴がいた。本間だった。

「岩崎、むこう行っても元気でやれよ！香澄のことは無理言って悪かったな！」

嬉しかった。もう誰にも声かけてもらえないと思っていたのに。

「釧路行ってもがんばるよ。本間も元気でな。」

そう言って僕は本間と握手した。嬉しかったと同時にすまない気持ちでいっぱいだった。本間の大親友だった香澄・・・僕はこの2人の仲さえも引き裂いてしまったのか。本間ごめん、許してくれ。

校門を出ると伸明が待っていた。

「和生、最後まで一緒に帰ろうぜ。」

僕にもちゃんと友達がいた。数は少ないかもしれないけど、本間にせよ伸明にせよ最後に声をかけてくれた・・・僕もひとりぼっちじゃなかったのかな。今になって気付いても遅いけど。

帰り道、伸明とはこの5年間の思い出話で盛り上がった。小1で初めて会った時のこと。小2の学芸会の劇で2人とも木の役でただ突っ立ってるだけだったこと。小3の時、信也と一緒に豊平川沿いをずっと自転車で探検して帰りが遅くなりみんなで怒られたこと。小4の社会見学のバスの中で伸明が酔って席をゲロまみれにしたこと。そして小5になってからのこと・・・。

別れ間際、伸明がポツリと言った。

「俺、高橋と一緒にいる信也や、瀬川と一緒にいる和生を見てう

らやましかった。俺は今まで好きな子と話したことすらないから・・・俺にもいつか信也や和生みたいな日がくることあるのかなあ・・・」

「きつとあるよ・・・俺は今またひとりだけど。」

「釧路行ってもがんばれよ！瀬川よりもいい女いるかもよ！？」

「ありがとう！手紙書くからな！！」

伸明と別れ、あとは家に帰るだけだった。あの家で寝るのも今日で最後・・・明日の昼過ぎには札幌を立つ。ここでの生活も全て終わる・・・。

第19話「すれ違い・・・」

引越しの日の朝が来た。家の中は見渡す限りダンボールでいっぱい。トラックに積まれて釧路に行くのを待っている。

居間に行くとおとうさんとおかあさんがソファに座っていた。

「あら、おはよう。」

「おはよう。和生、ぐっすり眠れたか？」

「・・・うん、まあ。」

「早く朝ごはん食べちゃいなさい。9時には引越し屋さんが来るんだから。」

食卓の上にパンが2枚と目玉焼きが乗っている。札幌での最後の食事。何だか妙な気分だな・・・。

「9時に引越し屋さんが来て荷物を持っていくから。その後、部屋をざっと掃いて、11時に買い物と近所に挨拶して、12時にここを出るから。わかった？」

一緒に朝ごはんを食べながら、おかあさんが今日の予定を説明する。実際僕に関係することは・・・何もない。12時にここを出ることだけ。気楽にしていればいいや。

＊

引越し屋さんが来て家の荷物をどんどん運んでいく。最初は僕も手伝おうかと思ったけど、足手まといになるだけということがわかったので、窓から見える景色をぼんやり眺めていた。目の前に広がる藻岩山・・・小さい時からずっとこの山を見て育ったっけ。今日で見るのも最後なんだな。釧路には山なんてあるんだろうか？海と湿原しか思い浮かばない。

引越し屋さんが去り、家の中がガラーンとした。あるのは家の車で一緒に積んでいく荷物のみ。モノが無い家はこんなに殺風景なんだ。

小さい頃からの思い出がいっぱい詰まっている家・・・持ち家だから二度と住めないってことは無いんだろうけど、あまりにも寂しすぎる。

「和生、信也くん達とお別れしないでいいの？」

おかあさんが言った。考えてみれば今日は日曜日。みんな休みだ。でも僕にはわざわざ見送ってくれる友達はいない。それ以前に僕の家を知っているのも信也以外ないのだ。今まで友達を呼んで家で遊ぶこともほとんどなかった。ここにきて今までの人間関係のツケが来たかな？まあ自分で招いた結果だからしょうがないけど。

「別に。信也はもう友達じゃないし、他にも特に親しいヤツいなかったからいいよ。」

寂しいけどこう言うしかなかった。

＊

「じゃあ、おとうさんとおかあさんは近所に挨拶してからちよっと買い物してくるから。戻ってきたら出発よ。」

「うんわかった、僕は特に用事も無いから家にいるよ。」

おとうさん、おかあさんが出て行った。家の中は僕ひとりだけ・・・何もやることがない。本や遊び道具は全部荷作りしてトラックに乗せられてしまった。テレビも無い。考えてみれば朝からずっとスウェット着たまんまだった。着替えるか・・・そうだ！着替えついでにシャワーを浴びよう！！確か電気とガスはまだ通ってるはず！石鹸とシャンプーは無いけどまあいいか。お湯をかぶるだけでもだいぶ気分が違うはず。

脱衣所に行ってシャツとパンツをスウェットごと脱ぎ捨てる。さあ浴びるか！！

蛇口をひねって、ツマミをシャワーにかたむける・・・シャワーの水が飛び出しバスタブにあたって心地よい音がする。やがて水は湯にかわり、湯気が浴室全体をつつむ。左肩にシャワーで湯をかける・

・温かくて気持ちいい。全身に湯をかけた後、頭から湯をかぶった・・・何もかも洗い流してくれる感じがする。このまま今までの嫌な思い出も全部洗い流して欲しい。昌明達にいじめられたことも、クラス全員から無視されてたことも、香澄のことも・・・そして何もかも綺麗になった状態で釧路に行きたい。

（ガチャ！）

玄関のドアを開ける音がする。おとうさん達が帰ってきたのだろう・・・それにしてもずいぶん早いなあ。まあいいや、ほっとけば・・・。

＊

心地よいシャワーだった。身も心も洗われたような気がする。ゲッ！バスタオルが無い！！洗面台に小さなタオルがかかっているだけだ・・・。

「おかあさん、ごめ〜ん！バスタオル全部送っちゃったっけ？」

・・・何の返事もない。おかしいなあ、さっき帰ってきてなかったっけ？しょうがない、洗面台のタオルで拭くか・・・。

身体を拭いたのはいいが、着替えも自分の部屋に置いたまんまだった。裸で取りに行く。

でもさっき玄関のドア開ける音したけどなあ・・・不信に思い自分の部屋に行く前に玄関に行ってみた。僕の靴以外無い。

「なんだまだ帰ってきてないんだ・・・」

そしてふと下駄箱の上を見た時だった・・・小さな箱が置いてある。水色の包装紙に青いリボンをかけて・・・。

「なんだろうこれ・・・誰が置いたのかなあ？」

リボンをほどき、中を開けてみた。タヌキがお財布もったデザインの貯金箱。可愛いけど幼稚っぽくない感じ。さらに箱の中をのぞきこんだ・・・小さな手紙が入っていた。開けて読んでみる・・・。

く岩崎くん、いつまでもお元気で

香澄く

・・・香澄からだ。さっき玄関のドアを開けたのは・・・なんで僕の家知ってるんだろう？　そういやあ以前信也の誕生日の時に・・・覚えていたのか。

プレゼント持ってきてくれたんだ。僕は香澄に嫌われてるんじゃないかなったつけ？　どうなってるんだろう・・・ああ！　何だって僕はこんな時にシャワーなんて浴びてたんだ！！

頭の中が混乱している・・・さっきドアの音がしたのが10分くらい前。今の時間が11時50分・・・。

今ならまだ間に合う！！

第20話「狂乱のダッシュ!そして・・・」

服を着なくちゃ!もう格好なんて言ってられない。風呂場にある脱ぎっぱなしのスウェットだ!シャツもパンツも重ねたまま脱いだのですぐ着れる!靴を履かなきゃ!靴下履いてないけどいいや!鍵!何も取られるものは無い!

玄関を出て、マンションの廊下をダッシュ!!あっ、おとうさん、おかあさん・・・かまわん!!

「かつ、和生!そんな格好でどこいくの!?今からもう出るのよ!」

「ごめんっ!ほんのちよつとだけ、ほんのちよつとだけ待ってて!」

その後もおかあさんは何か言ってたけど無視!!時間が無い!!

ここは5階。エレベーターの前に行く・・・何っ!!今おとうさん達が降りたばっかなのに何で下に向かってるんだ!もういい!!階段をダッシュで駆けおりる、普通におりてたら間に合わない、4段飛ばしくらいでおりる・・・

(ドガドガ~~~~ンッ!!)

しまったと思ったがすでに遅し、3階と2階の間の踊り場で足を踏み外して転倒・・・

こんなんでは負けるかゴルアアアッ!!立ち上がり1階までダッシュ!!

自転車自転車・・・ああくそっ!!これも送ったんだっ!全力でダッシュだあああああっ!!

香澄の家まで約1キロ弱・・・学校経由だと遠いが僕の家からだったら一本道で行ける!道端にネコ!何で走ってるのに突っ込んでくるんだ!!

(ミギヤアッ!!)

つまづいてよろめく。こけそうになるが持ちこたえて体制を整える・

・ダッシュ!!

目の前に信号・・・駄目だあ! 渡る直前で赤になる・・・信号無視だああ!!

(プップーッ!!)

「何考えてるんだっ! 死にてえのかっ!!」

車に乗ったオヤジが叫んでる。でもそんなのかまっている暇は無い・
・えっ!?

(バーーーンッ!!)

しまった・・・目の前に来た自転車と正面衝突だ。よろめいてくれる。そのまま街路樹に激突・・・さすがにフラフラする。

「おい! お前、大丈夫か!!」

自転車に乗っていた爺さんが心配そうにこっちを見る。大丈夫なわけないだろ!!

「・・・少し休んでった方がいい。すぐ近くに俺の家があるから。」
冗談じゃない! 僕だって時間が無いんだ! 爺さんを振り切りそのまま突っ走る。

国道を横切った。香澄の家が見えてきた・・・もうちょっと、もうちょっとだ!!

(ピンポーン!)

香澄の家のドアにたどり着いたと同時にチャイムを押す・・・何の反応もない。

(ピンポンピンポーン! ドンドンドンドンドンッ!!)

チャイムを何回も鳴らす。ドアも叩く・・・駄目だ、何の反応もない。ドアも鍵がかかっている。誰もいないのか・・・。

*

来た道をトボトボと歩いて帰る。さすがに全身の力が抜けた。出発まで時間が無いが走って帰る気力も無い。咄嗟に家を飛び出したとはいえ僕は何を期待していたのだろう・・・。

途中にある児童公園。12時でみんなごはんを食べに帰っているのか誰も・・・えっ！？ダッフルコートを着た女の子がひとり空を見上げている。間違いない・・・香澄だ。

「かすみいっ！！」

香澄のいるところまで猛ダッシュで走る。香澄が驚いた表情でこっちを見ている。距離がどんどん近くなる。10メートル、5メートル、3メートル・・・たどり着いた瞬間、香澄に思いっきり抱きついた。僕の頬と香澄の頬が触れ合う。僕の顔に香澄の髪がかかる・・・香澄の匂い。もう離れたくない。もうずっと、ずっと・・・。「香澄い・・・俺、絶対、絶対に札幌に戻ってくるから、その時まで、その時まで絶対に待ってて・・・。」

「・・・岩崎くん、無理しないで。釧路に行ったらわたしよりもっと好きな人見つけて。それにわたし守れる自信がない・・・。」いつの間にか自分のことを名前と言わなくなった香澄・・・時が経てばみんな少しずつ変わっていくのか、僕も香澄も・・・。

「嫌だよそんなの！絶対に嫌！！絶対に、絶対に戻ってくる！！」

「わたし・・・岩崎くんのこと好きでよかった。今までのこと絶対に忘れないよ。」

誰もいない昼間の公園、出来ることならずっとこのまま抱き合っていたい・・・でも僕にはもう時間がない。戻らなきゃ、戻らなきゃと思うほど、香澄を抱きしめる腕の力が強くなっていく。このまま時間が止まってしまえば・・・。

「・・・お返し。」

（えっ！？）

香澄がそうだった瞬間、パンツの中に香澄の手が入ってきた。そして僕のおちんちんを渾身の力で思いっきりつまみあげた・・・。

「痛っ！いてててっ！！」

パンツから香澄の手が離れた。それと同時に香澄の身体が離れる。

「バイバイ！じゃあねーっ！！」

笑顔で手を振る香澄・・・そのまま走って家に帰って行った・・・。

しっ、知ってたのか・
・
・
・
。

最終話「釧路へ・・・」

一台の車が炭住街の中を通る。今、夕張を通過している途中。これから日勝峠を通過して釧路へ・・・。

香澄と別れた後、僕は急いで家に帰り、結局1時半過ぎに札幌を出発した。おとうさん、おかあさんにはどこに行ってたんだとか、時間がもう無いのにかいろいろ言われたけど、別にかまわなかった。だって最後に香澄に会うことが出来たんだから・・・。

夕張・登川の炭住街を抜けた、ここからは日高町までずっと森ばかり。

「ところで和生、プレゼントに貯金箱もらったみたいだけど、誰からもらったの？」

車の中で暇になったのか、おかあさんが唐突に聞いてきた。

「えっ、これ！？・・・クラスのみんなでカネ出し合ってくれたみたいだよ。」

「ふん。」

香澄からもらったなんて何だか照れ臭くて言えなかった。それにこの貯金箱のことは僕と香澄だけが知っていればいいような気がする。二人だけの思い出というか、二人だけしか知らないことに価値があるというか・・・。

＊

日高町の市街地を抜けて日勝峠に向かう。もうじき夕暮れだ。

「日勝峠は夏は霧がかかったり、冬は猛吹雪だったりすることが多くて事故が多いんだよなあ・・・。うちらも交通事故に合ったりして。」

「いやーっ、おとうさん縁起でもないこと言わないですよ。」

おとうさんが運転しながらおかあさんと話してる。

僕はというと、香澄のことしか頭に無かった。

「絶対に札幌に戻ってくる」

早くて2、3年後。その時には僕も香澄も中学生。人の気持ちなんてわからない。ひょっとしたら香澄も今よりももっと僕から遠い存在になってしまっているかもしれない・・・でも僕は決めたんだ。もう一度絶対に香澄に会うつて。だって僕は香澄以外の女の子なんて考えられないから・・・。

峠を越えた。それからしばらくしてのことだった。

「おお！おかあさん、和生、見てみろよ！」

おとうさんが興奮しながら指をさした。

空一面がオレンジ色に染まっている。ところどころに、小さなわた雲が散らばっている・・・大通公園で香澄と一緒に見たポップコーンの雲だ。そして眼下には雄大な十勝平野。西に向かうにつれ、オレンジ色の空がだんだん暗くなり、地平線あたりでは藍色に近くなっている。こんな綺麗な景色を見たのは初めてだった。目を離すことすら出来ない。正直言葉が無かった・・・。

これから先、今まで僕が知らなかった、見たことも聞いたこともなかったようなことにいっぱい巡り合うのかもしれない・・・その時僕は今の気持ちを持ち続けることが出来るんだろうか・・・。

夕焼けが終わり、十勝平野が闇につつまれようとしている。僕の中の不安を表しているかのように。ポップコーンの雲ももうじき暗闇にのまれて見えなくなってしまう・・・。

平成21年11月19日

中津川せいや

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1429i/>

ぽっぷこーんの雲の下で

2010年10月11日18時52分発行